

いつもの場所で、彼と
彼女らは仲睦まじく遊
んでいる。

サンダーソード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これから彼と彼女らは、なんの横槍も受けず、ただひたすら、睦むだけだ。
どこまで いちやつけるか見せてあげよう。

見るがよい。

奉仕部が早口言葉を口実にやりたい放題いちやこいてます。甘やかな世界。

目次

1. 「あなたは早口言葉苦手そうよね。普段人と話さないから」 ————— 1
2. 「よし、じゃ、あたしもこてしらべ。『赤巻紙青巻紙黄巻紙』っ！ ……ねえゆきのん、巻紙ってなんだろう？」 — 26
3. 「……………もう、私たちの年齢なら、子供は、つくれる、もの」 ————— 41
4. 「あら、私たちは今遊んでいるのでしよう？」 ————— 61
5. 「うわあ……………ゆきのん本気だ…………」
77
6. 「ぼ、妨害するの」 ————— 94
7. 「……………それ、では。お題、は、『二人は、私のこと、を……………どう思っていますか？』」 ————— 114
8. 「与えずに求めるばかりでは、不実というものよね…………」 ————— 131
9. 「……………『また、勝てなかったよ』」 ————— 141
10. 「……………劣情の籠もった瞳。身の危険を感じるわ」 ————— 150

1. 「あなたは早口言葉苦手そうよね。普段人と話さないから」

「ねえゆきのん、『かえるぴよこぽこみぴよこぴよこ、あわせてぴよこぴよこむぴよこぽこ』って言ってみて？」

それは、由比ヶ浜の唐突なお願いから始まった。のはいいんだが、お前それ自分で言えてねえぞ。

「あなたが言えてないのだけれど……」

「え!? 言えてない!? うーん……『かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ、あわせてぴよこぴよこむぴよこぽこ』。ど、どう? 言ってる?」

「ええ、今度は言えてたわ」
「やったー!」

由比ヶ浜は諸手を挙げて喜び、それで満足したのか雪ノ下に抱きついて頭を擦り付ける。

雪ノ下はその頭を少しだけ撫で、紅茶にそつと手を伸ばした。

……いや、雪ノ下に言わせたかったんじゃないの? 早口言葉。今日も奉仕部は平和

です。

しかしひとしきりゆるゆると目的を思い出したのか、ガハマさんがガバツと起き上がってゆきのんに詰め寄る。

「じゃ、ないよ！ ゆきのん、言える？」

「ええ、言えるわよ」

「そっかー。だから違くて！ 言えるんなら言ってみよー」

「嫌よ。なんで私が」

「んー……難しすぎた？」

「……あなた、挑発が上手くなったわね」

雪ノ下の背後にメラッと陽炎が立ち上る。

いや、多分由比ヶ浜は挑発のつもりすらないぞ。お前が破滅的に乗りやすいだけだ。

……マジでこの性格直さないと、本当にいつか破滅しそうで怖いんだよなあ。

「いいわ、聞いてなさい。『かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ、あわせてぴよこぴよこ』」

「おー、やっぱゆきのんやるなあ」

「当然ね」

と言いつつ髪をかきあげる得意顔に隠しきれない喜色が滲んでるんですが。

そんな雪ノ下に再度抱きついた由比ヶ浜がくるつとこっちに顔を向けて、話の矛先を向けてくる。

「ヒツキーは言える?」

「俺は……」

「あなたは早口言葉苦手そうよね。普段人と話さないから」

「お前は早口言葉得意そうだな。普段人と話さないのに」

「いくらなんでもあなたよりは人と接するわよ。……私には、由比ヶ浜さんがいる、のだし」

「ゆきのん……!」

頬を赤くして明後日の方を見ながら零れる途切れ途切れの台詞に、由比ヶ浜が感極まって更に強く抱き寄せる。

「だが俺には小町がいるしな。それに家ではパソコンやら本やらで面白いフレーズがあつたら呟いてはフヒヒと笑う習性があるから別に早口言葉も苦手じゃねえし」

「ヒツキー……それはちよつとさすがに……」

「その、あえてオブラートに包んで忠告するけど、あなたのそれ笑い話では済まないレベルで気持ち悪いわよ……?」

「おいオブラート破れてんぞ。剥き身もいとこじゃねえか」

雪ノ下にそこまで沈痛な顔で言われると深刻さが倍増しちやうんだけど。

あまつさえ由比ヶ浜にまで言葉を濁されるとかマジでヤバイんじゃないかと思っ
ちやうよ？ え、みんなやるよね？

「だからまあ、普通に言えるぞ。『かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ、あわせてぴよこ
ぴよこむぴよこぴよこ』」

「むう……ちゃんと見えなかったのあたしだけ……」

「むしろ間違いなくお前が一番人と話してるのになんでだよ」

「人と話せば早口言葉が得意になるといわけでもないのかしらね」

そう言つて、雪ノ下は由比ヶ浜に抱きつかれたまま読書に戻る。

反例としての雪ノ下を見る限り、因果関係はないかもしれないが。俺もそうか。

俺も手元の文庫本を開いて、読書態勢に戻ろうとするのだが。

「あ、じゃあさ、早口言葉でゲームしない？」

由比ヶ浜が明るい声で、またぞろなんぞ言い出した。

「ゲーム？」

ああ、雪ノ下が食いついた。負けず嫌いの血が騒いじやいましたか。

「そ。ゲーム。お互いにお題を出し合つて、それを言うの。見えなかったら負けで」

「……そうね。いいわ。勝負しましょう」

ゲームだつってんのに勝負に変換される雪ノ下印の辞書機能、早いとこアップデー
トかけたほうがいいんじゃないですかね。え、仕様？

「早口言葉は三回繰り返し、極端に長い文章……そうね、五十文字を超えるものはな
しとしましょう」

「なんで五十なの？」

「蛙が三十三文字だったから、まともな早口言葉なら五十文字を超えることはないで
しょう？」

「数えたんだ……じゃあじゃあ、お手つきは一回までね？ 一回も失敗できないのはさ
すがに辛いし……」

「それ、早口言葉苦手な人が余計に不利になるルールだと思うのだけど……まあいいわ。
比企谷くんもこれでいいわね？」

「……俺もやるのか」

「え、ヒツキーやんないの？」

「どうしてやらないと思ったの？」

いや、由比ヶ浜が誘って雪ノ下が乗った時点で薄々やらされることになるだろうとは思
ってたけどね。

だが無駄とわかっていても抗うのが少年漫画主人公の生き様。平塚先生も諦めたら

そこで試合終了だよって言ってるじゃないか。違うか。違うね。何重にも違うね。

「……ルール確認させてくれ」

まあ俺少年漫画の主人公じゃないしな。無駄だとわかってることに抗ってどうなるというのだ。

「出題者が早口言葉を提示。回答者はそれを三回繰り返す。早口言葉は五十文字以内で、お手つきは一回まで。以上ね」

「了解だ」

まあ開始早々サクッと負ければいいだろう。負けるところで特に失うものもない。無駄に抗うよりも最小限流されて可及的速やかに脱出するのが労力を最低限に抑える最善の方法よ……！

などと考えてたら、二人の肩がピクリと動いて、そのままじとつとした視線を向けられる。え、何？ 俺なんかした？

無言で見つめられ続けていると居たたまれなさがどんどん湧いてきて、自分でも分かるほど挙動不審になっていく。

「……ヒツキー、わざと負けようとか考えてない？」

「へっ!!? なんでだ？」

あかん。なんか知らんが完全に見透かされてる。つーかこの返答じゃ自白も同然だ

ろ俺。

それを聞くと由比ヶ浜は長机に突っ伏してむくれ、雪ノ下は額に人差し指を当てて溜息をつく。

「この男に全力で事に当たるといふ人間らしきはないのかしら……」

「ねえヒツキー、あたしたちと遊ぶのイヤなの……？」

「ぐっ……いや、それは……」

「え、あ……イヤ、なんだ……」

むくれてた由比ヶ浜が目に見えて沈む。ブワツと背中から頭皮までの汗腺が広がる感覚。それと同時に襲ってくる尋常じゃない罪悪感。

「いや違うから！ そのいやは否定の嫌じゃなくてただの感動詞だから！ 全然嫌じゃない！ 嫌じゃないから！」

慌てて否定を入れるも、沈んだ由比ヶ浜を引き上げるには足りない。雪ノ下がもう一つ溜息をついて、由比ヶ浜の手を握り口を開く。

「では、飴と鞭があれば死ぬ気で勝負に挑むのね？」

「……お前が言うと、比喩でなく死ぬ気で挑まされそうで怖いんだよ」

雪ノ下はにつこり笑った。いや、笑うタイミングおかしいでしょ何そのすげえいい笑顔。ちよつと状況忘れて見惚れそうになるからやめてくれない？

「じゃあ、比企谷くんが勝ったら私が一週間昼食にお弁当を作ってきてあげるわ。負けたら……そうね、由比ヶ浜さん、比企谷くんに一週間お弁当を作ってきてくれないかしら」

「あたしのお弁当罰ゲーム扱い!？」

沈んでいた由比ヶ浜が跳ね起きて、提案の内容に食って掛かる。その顔にもう憂いの色は見えなかった。少しだけわだかまっていた感情が綺麗に押し流されていく。

心中から湧いてきた笑みを引きつった苦笑に変えて、ペナルティの内容に苦言を呈する。

「待て……それは人が死ぬぞ……!」

「罰ゲーム扱いだ! うわああああん!」

由比ヶ浜が泣いて雪ノ下に縋り付く。いやその罰ゲーム提案したの君が泣きついてる雪ノ下なんですけどね。

「これなら、本気で戦う気になるでしょう?」

「おお、強制的に死ぬ気にさせられたわ」

一度ならまだしも、由比ヶ浜の弁当が一週間続くとなるとさすがに健康被害も出そうで怖いよね。しかし流れでこうなったけど、由比ヶ浜はこれいいのか? あいつに何一つメリットないんだが。

「つつーか由比ヶ浜、雪ノ下はああ言ったけどお前いいの？ 一週間毎日弁当作ってくるとかちよつとゲームに負けて支払う努力としては大きすぎるんだが」

まして由比ヶ浜自身の勝敗でなく、俺が勝ったか負けたかで決まる罰ゲーム。改めて考えてみるとわけわからん理不尽さだよなこれ。

だがそう言われて、由比ヶ浜はお団子をくしくしやりながら俺を見る。少しの間ぼーっとした由比ヶ浜の視線を受け止めていると、すつと姿勢を正して静かに告げる。

「あたしは……いいよ。ヒッキーが負けたら、お弁当作ってくる」

「お……おう……」

その由比ヶ浜の透明な表情がどうしてか焦りを助長させて、へどもどした返事しかできなくなる。

雪ノ下はそんな俺たちを見てくすりと笑った。

「では、それでいいかしら」

「待て、俺だけに罰ゲームがあるのは不公平だろ。お前らはどうなんだ」

「私も由比ヶ浜さんも、そんなものがなくても全力で闘うもの。それに、あなたにはその分の報酬もあるでしょう。それとも、得られるものが私のお弁当では不足？」

「ぐつ……そりゃ、不足は、ねえが……」

雪ノ下の弁当とか金銭換算不能なレベルでのレアアイテムだし。多分これ由比ヶ浜

しか食ったことないんじゃないの？

「ねえ、じゃああたしとゆきのんにもちゃんと罰ゲームがあれば、なんかごほうび貰っていいってこと？」

「……理屈の上ではそうなるけれど、私はいいわ。そんな行為でささやかな征服欲を満たしても仕方ないのだし。ただ勝利したという事実があれば」

「自信ないんだ？」

雪ノ下の発言を由比ヶ浜がぶった切る。あ、今度は乗せにいつてるわこれ。

「……本当に挑発が上手くなったわね。いいわ、私と由比ヶ浜さんにも賞罰を決定しましょう。……後悔させてあげる」

「ふふ、ゆきのん怖い」

完全に由比ヶ浜の掌なんですけど、大丈夫か雪ノ下。基本スペック無茶苦茶高いのになんでこういうときに猪突猛進になるんだお前。

雪ノ下は目を閉じて、何事か考え込む。由比ヶ浜はそんな雪ノ下から少し離れて、長机に頬杖突いて穏やかな目で待っていた。

時計の秒針が一周する頃、雪ノ下が目を開いて口火を切る。

「決めたわ。私が由比ヶ浜さんに勝ったら、勉強会をしましょう」

「え？ するっ！ それは罰ゲームじゃなくてもするよ！」

由比ヶ浜はガタツと席を蹴立てて、勢い良く宣言する。そこにはもう雪ノ下を見守るような気配はなくなっていた。

雪ノ下はそれを勝ち誇ったような笑みで迎える。

「勉強会よ。いつもみたいなの、勉強会と銘打った雑談じゃなくて、勉強しかない勉強会。あなたの成績を数倍に引き上げてあげるわ」

「うっ……。えつとでも、ちよつとくらいなら……」

「そう言つてちよつとで済んだ例がないでしょうあなた」

「ううっ……。お菓子とかも、なし？」

「勉強の妨げになるのならダメね。罰ゲームでしょう？」

「うううっ……。うゝゝゝ」

万策尽きた由比ヶ浜は、長机にへばりついてじつと雪ノ下を見つめる。つつても対ゆきのんならこれが最強武器なんだよなあ。

由比ヶ浜の視線に居心地悪そうに身動きする。つてはええよまだ20秒も経つてねえよ。

もうすぐ陥落かなーと思つてたら、由比ヶ浜がはあつと溜息を吐いて上体を起こす。

そしてお団子を弄びながら、由比ヶ浜は口を開いた。

「うー、しょうがないか。罰ゲームだし。がんばつて勉強するよ。……ゆきのんと一緒

なら、ちゃんとできそうだし」

「由比ヶ浜……」

その発言に多少の驚きを感じていると、雪ノ下はくすつと笑った。

「それなら、普段の勉強会でもちゃんとやってもらいたいのだけれどね」

「ひどいよっ!?!」

ひとしきりクスクス笑うと、ふいつと顔を背けて小さい声で付け足した。

「……………休憩時間は、ちゃんと取るわ。人間の集中力は限られているのだし。……雑

談や間食は、したければその時にしなさい」

「……………いいの?」

「……………その方が効率がいいもの」

「……………うんっ!」

由比ヶ浜は雪ノ下に抱きついて、雪ノ下は表面上鬱陶しそうにしながらも由比ヶ浜を払いのけようとはしない。

ほんどこいつら仲いいよなあ……。

ほっこりしながら二人のゆるゆりをゆるりと眺めると、由比ヶ浜が夢心地な声でそれを言った。

「あたしはね、もう決めてるの」

その宣言に雪ノ下がピクリと動き、由比ヶ浜の肩を支えてちゃんと椅子に座らせる。

「あたしが勝つたら、デートしよ」

それ、は。

「その、由比ヶ浜……」

俺の一方的な都合で延期し続け、形を変えて由比ヶ浜が果たさせてくれたデート。

あれを思うと、うまく言葉が出てこない。出てきてくれない。

「んーん。約束とかじゃ、なくってさ」

んっ、と背筋を伸ばして胸を張り、夢現から帰ってくる。

「あたしと、デートするの。罰ゲーム」

「……お前とのデートが、罰ゲームにや、なんねーだろ」

そう言うのと彼女はふにやつと笑う。

「へへ……嬉しいな……。でも、罰ゲームは罰ゲームだよ。ヒツキーが全部考えて、あた

しとデートするの。ヒツキー、そういうの超苦手でしょ?」

……なる、ほど。そりゃあ確かに苦手だわ。

「……納得したわ」

「うん。頑張つてね」

でも、な。それはやっぱ罰ゲームにはなんねえよ。どれだけ大変でも、絶対に。

注がれる穏やかな眼差しを見ていられなくて、ふいつと僅かに目を逸らす。と、逃した先でも暖かな眼差しとぶつかった。

おっつけ、由比ヶ浜も雪ノ下に目を向ける。

「ゆきのんもだよ」

「……私、も？」

「そ。ゆきのんも、あたしが勝つたらデートするの。罰ゲーム。ゆきのんが全部考えるんだ」

「それは……大変ね」

「うん、大変だ」

「……罰ゲーム、ね」

「頑張つてね」

「いいえ。……そもそも、負ける気はないもの」

「あたしも負けないよー」

雪ノ下は勝ち気な表情で由比ヶ浜に笑いかける。由比ヶ浜もニコニコと笑ってそれを見ている。

しかし思ってたよりずっと大事になってきたなこれ。賞罰が大掛かりになりすぎだ。

「後は比企谷くんが由比ヶ浜さんに勝つたときの罰ゲームが決まれば全ての賞罰が確定

するわね」

「ん、まだ残ってたか？ いや、それはなくていいよ別に」

由比ヶ浜の罰ゲームが罰ゲームって感じじゃないしな。ここに景品付けたら収支が合わなくなっちゃう。

「それは駄目よ。不公平、なのでしよう？ 報酬があるのなら相応の罰則もあるべきだわ」

雪ノ下は俺の台詞を引き合いに出してくる。確かにそれが元で始まった話だから、そう言われると何も言い返せないんだが。

「そーだよヒツキー。なんかないの？ あたしにやってほしいことならなんでもするよ？」

「なんでも、って……」

お前そういう発言を思春期真っ盛りの男子高校生にするんじゃないやありませんマジで。マジで。ほんとマジで。

その言動に万乳引力が働いて、つい一瞬その豊かな膨らみに目をやってしまった。もうね、びつくりするほど反射。人間の本能ってここまで色濃く残ってたのってレベル。

などと脳内で自己弁護やってみたところで、そんな不躰な視線を雪ノ下が見逃してくれるはずもなく。

「待て、仕舞え」

凍えるような眼光で何も言わずスマホを取り出す雪ノ下を宥める。

「比企谷くん、その目は通報するに足る要件は満たしていると思うのだけれど、どう思うかしら」

「分かるが、待て。待つんだ。その気軽ないちいちぜろは俺が死ぬ。社会的に」

おい今親指動かなかったか。馬鹿なことはやめるんだッ！

しかし俺たちがこんなバカをやっている横、由比ヶ浜はと言うと頬を赤くはしたものの、目を伏せ胸元に右の指先を当て、何事か考えているのか表面上は平静を保っているようにみえる。

普段なら『変態！』の一言でもぶつけられそうなんんだが、それも無い。

雪ノ下も会話の流れに違和を覚えたのか、スマホをしまつて由比ヶ浜をちらりと見やる。

「由比ヶ浜さん？」

その呼びかけにピクリと反応し、由比ヶ浜は再起動する。

「ヒツキー」

ゆるりと体ごと俺の方に向けて、その紅をさした顔に浮かぶのは透き通るような無表情。落ち着いた声音のせいかな、童顔の彼女が不思議なくらい大人びて見えた。

「は、はい」

「身体、触りたいの？」

「は……はあっ!?!」

「由比ヶ浜さん!?!」

ちよ、はっ!?! 突然何言い出してんのこの子!?!

雪ノ下も驚愕で言葉が続かない。腰掛けたまま崩したバランスを、椅子の脚を鳴らし取り戻していた。

「おま、この……!?!」

ビッチ、と口をついて出る前に、その言葉は口腔内で溶けて消えた。

耳まで真っ赤にしながらも何も言わずただじつと見つめてくる由比ヶ浜に、跡形もなく溶かされてしまった。

「……………」

待っている。由比ヶ浜は俺の言葉を待っている。

由比ヶ浜の熱に当てられたように、俺の頭にも熱が灯る。

その熱のせい、再度視線が下がってしまう。やはり暴力的なまでにでかい。

はつと自分がやっつることに気付いて目を逸らす、完全に手遅れ。気持ち悪いほどにまじまじ見てたのがバレバレである。

ガリガリと頭を掻いて、歯の奥をギリッと鳴らす。

由比ヶ浜はじっと、見ている。

「……………ん」

そつぽを向いての消え入るような肯定。届いているかすらも分からない。

由比ヶ浜は頭は悪いし八方美人だが、決して軽い女の子じゃない。知っているのだ。一年間、ずっと一緒にいたから。

「そっか」

真剣な表情で、真摯な態度で、こんな馬鹿げたことを由比ヶ浜は俺に問うた。

そして、あんな無様な返答に、満足気に微笑んでくれた。

「じゃあ、いいよ」

「……………」

その顔を見ていると、本当にいいのか、と問い返すことはできなかった。

雪ノ下も、驚愕と不安、羞恥にそれ以外の何かが縋い交ぜになったような表情でそれを見ていた。

由比ヶ浜が目を閉じて、すうつと軽く息を吸う。

はつと息を吐いてぱちつと目を開くと、元気な笑顔とともにいつもの由比ヶ浜がそこにいた。

「じゃ、あたしが負けたら、ヒツキーはあたしとゆきのんを触っていいってことで！」
それで、なんかまたとんでもない爆弾をぶん投げてきた。

雪ノ下は今度こそ椅子を蹴立てて立ち上がり、由比ヶ浜に食って掛かる。

「ちよ、待ちなさい！ 由比ヶ浜さん、どうして私も?！」

もう何なの？ さつきから驚愕とそれ以外で心臓跳ね回りすぎててもたないよ。

雪ノ下の疑問に、由比ヶ浜がにこにこ顔で手を握る。出鼻を挫かれたみたいに、目に見えて雪ノ下の勢いが減退した。

「ダメなの?！」

「……ダメ、というか、私が罰ゲームの対象になる謂れはないでしょう」

「んー……。ゆきのんがヒツキーに勝ったら、あたしがヒツキーのお弁当作るんだよね。なら、ヒツキーがあたしに勝ったら、ゆきのんも一緒に罰ゲーム受けてもいいんじゃないかな」

「それは……」

由比ヶ浜が雪ノ下の手を撫で、じつと目を見る。

どうにも追い詰められてるっぽい雪ノ下が、見返り美人図でこちらをちらりちらりと窺ってくる。やめろよそのポーズお前がやると破壊力が凄いなんだよ。つーかこの状況、俺に何が出来るというのか。

「あ、でもどうしても嫌なら、やめる……けど……」

由比ヶ浜はやりすぎたと思ったのか、さすっていた手を止め雪ノ下の反応を待つ。

麗しい黒髪の隙間から見える耳が真っ赤に染まっている。時折振り向くその顔も動揺に。違った同様に。俺のほうが動揺してないかこれ。いや雪ノ下も動揺してるようだけど。

「ひ、きがやくんは……その、わた、しも……」

雪ノ下がとぎれとぎれに吐く言葉が、耳の中で反響する。囁き声もかくやな小声のはずなのに、聞き逃す気が全くしない。

「触りたい……の?」

単純に本能か、それとも由比ヶ浜に問われたときの熱がまだ残っていたのか、もしかすると自分の意志か。

それすらもわからないけど、雪ノ下がそれを言い切ったとき、雪ノ下の後ろ姿を舐めるように見てしまっていた。

艶やかな濡れ羽色は背に広がり、本当に中身が入っているのか不安になるほど細い腰、真っ白で滑らかな脚。

背中を見せているとはいえこちらを窺っている雪ノ下にそれがバレないはずもなく、元より向かい合う由比ヶ浜には隠しようもない。

雪ノ下の紅潮が最高潮になり、由比ヶ浜は何故か知らんが喜色を滲ませて成り行きを見守っている。

視線を彷徨わせ、頬は引きつり、落ち着かなさに頭を掻き毟って細く長い息を吐く。「お前ら、自分の容姿を自覚しろよ……」

吐息に混じらせた呟きは、似非難聴系主人公でもガチで聞こえないレベルの音量になつてるんじゃないだろうか。

「お前らより可愛い女の子なんて、どこ探したっているわけねえだろ……」

顔が赤熱する。二人の反応を見るところじゃない。自分の心音が耳に煩すぎて、つい今しがた喋ったはずのことを本当に喋ったのかも分からなくなる。

頭抱えて蹲りたい。なんなら今すぐ帰宅して布団に入って叫んで忘れて全部なかったことにしたい。

……そんなことできたらトラウマ抱えてねーやな。むしろ連鎖的に過去のトラウマが爆発しそうだ。フフ怖い。

脳内で現実逃避を嗜んでいると、うとうとう、と羞恥に悶えるような声が聞こえてきた。自分でも気付かないうちに呻いていたかとも思ったが、どうやら発生源は俺ではなく。

その声の元に目を向けると、雪ノ下が由比ヶ浜の手を両手で握り、しゃがみこんで膝

頭に顔を埋めている。垣間見える頬や耳は、これ以上ないと思っていた紅潮に更に上があつたことを教えてくれた。

由比ヶ浜も由比ヶ浜で、魂でも抜かれたかのようにぼうとした顔で俺の顔を見つめていた。こちらも全身の血流が顔に集まったんじゃないかと思うような紅色で、潤み濡れた瞳に縫い止められていると俺の方が吸い込まれそうになってくる。

なん、で。

二人がこんな反応、してるのか。

その意味を頭が勝手に、俺に都合よく考えそうになってしまふのを、無理やり止める。身体の中がぎゅうつと絞られるような焦燥感。それに押されて、はあつ、と灼けるような吐息が零れ出る。

思わず身震いしそうになるのを身を固くし腕をかき抱くことで抑え留め、昂りに熱を持つ目頭を誤魔化すために眼を閉じる。

我が事ながら、気持ち悪いこと甚だしい。

一体、二人に何を押し付けようというのか。何様のつもりで。

ふと気づけば、雪ノ下の声が止んでいた。

目を開いて雪ノ下を見ると、腕の隙間からこちらを覗く濡れた瞳と視線が合った。心臓が跳ねる。

雪ノ下は一瞬震え、膝頭に顔を押し付けるとすつと立ち上がった。その顔は由比ヶ浜の方を、つまり向こうを向いている。

一つ深呼吸をして、雪ノ下は口を開いた。

「……わかったわ」

動揺も狼狽も努めて押し殺した、平坦な声音。

「不公平は認められないものね……」

本当にいいのか、という問い返しは、その音吐に均されて消えた。

由比ヶ浜は目を細めて雪ノ下の顔を見上げている。

「……不公平は、認められないもの」

自分に言い聞かせるように、繰り返す。

ゆきのん、と小さな眩きが聞こえてきた。

「……ただし、私が由比ヶ浜さんに勝ったら、あなたも勉強会に参加しなさい。泣き言も

恨み節も一切を認めないわ」

呼吸を整え、振り向き、耳まで真つ赤な無表情で告げてくる。

「比企谷くんを学年二位にしてあげる」

「……了解だ」

どうにかこうにか、そっぽを向いたままそれだけ口に出して白旗を揚げる。不公平

は、認められないしな。

天使が通り、聞こえる音は身じろぎに附随する衣擦れとお互いの押し殺した息遣いだけ。と言うかなんで俺は呼吸音を立てることすら厭っているんだ。

頼むから誰かなんか喋れとぼっちの俺が初めて祈るしながらも、息苦しさに耐えかねてもうなんでもいいやと口を開きそうになったとき。

「きゅ、うけいを、一旦、ゲームの前に、挟みましよう。また、後で……！」

雪ノ下が一息に喋りだした。最初声がひっくり返ったのは聞き逃す。触れるとバツクダメージでこつちが死ぬ。

無表情を維持しきれず、泣き笑いのように崩してしまったことを彼女が顔を背ける一瞬だけ見てしまう。見てしまった。

台詞の後半にはもう、扉の方に足を進めている。俺も由比ヶ浜も反応する機を逸して、雪ノ下が扉を潜るまでそれをただ見送ってしまう。

扉を閉まる音で由比ヶ浜は再起動し、慌てて立ち上がる。

「ヒッキー！ ゆきのん連れ戻してくるから、ここ出てて！」

それだけ言い残して、雪ノ下の後を追っていった。

……いや、まあ。今顔を合わせるの、俺もしんどいし。

お言葉に甘えて、のっそり部室を出ていくことにする。

……マツ缶、買いに行こ。

2. 「よし、じゃ、あたしもこてしらべ。『赤巻紙青巻紙黄巻紙』っ! ……ねえゆきのん、巻紙ってなんだろ?」

結局、三十分ほどインターバルを置いてから部室に戻ることにした。

俺は一人で何も考えないようにしながらマツ缶飲んでたからその間どうなってたかは知らん。

正直味なんて分かったもんじゃないうっつーか、今思えば最後の方は機械的に空き缶傾けながら呆けてるだけだった気がする。

乾ききった空き缶をゴミ箱に放り込み、足を引きずるようにして部室まで戻る。

手をかけた扉がからからと音を立てて開く。雪ノ下も由比ヶ浜もなんかこつちをガン見してて、少しだけ視線に気圧された。

視線に晒されながらも自分の席に着くと、それを合図に雪ノ下が立ち上がった。

「ではまずはルールと賞罰の確認をしましょう。一、出題者が早口言葉を提示。二、回答者はそれを三回繰り返す。三、早口言葉は五十文字以内で、四、お手つきは一回まで。以上ね」

チヨークを手に取り、黒板に四つのルールを書きつける。カツカツと小気味よい音が

鳴ることに、綺麗な文字が並んでいく。

「私が比企谷くんに勝つたら比企谷くんは一週間由比ヶ浜さんのお弁当を食べること。由比ヶ浜さんに勝つたら三人で勉強会を開かせてもらうわ。覚悟はしておきなさい」

「あたしがヒツキーに勝つたら、ヒツキーが考えたデートするの。ゆきのんに勝つたら、ゆきのんが考えたデート。えへへ、楽しみだなー」

「んで、俺が雪ノ下に勝つたら雪ノ下が一週間昼食の弁当を作ってきてくれる。由比ヶ浜に勝つたら……その、二人に、触る」

最後の条件が異質すぎてヤバイ。なんなら口に出すだけで喉が渇くレベル。あ、二人も顔赤い。

雪ノ下が咳払いの声で熱っぽく淀んだ空気を禊ぎ、話を続ける。

「……そう、ね。それと、賞罰の履行期も決めましょう。お弁当はどちらが勝つても来週一週間。勉強会は……基本、月水金の放課後でいいかしら。由比ヶ浜さんには何かしら用事が入ることもあるでしょうし、あくまで目安だけけれど」

「由比ヶ浜を強調して言外に俺は違うって言ってますせん？ それ。俺だってなんかしら予定入るかもしんねえだろ」

「あら、入るの？」

「……いや、入んねえだろうけどよ。お前はどうかんだよ」

「……由比ヶ浜さんには、と言ったでしょう」

雪ノ下の視線が流れるように逸れる。あ、はい。理解しました。

「あたしもちゃんと来るよ! 罰ゲームだし!」

由比ヶ浜が元氣よく答える。なんか雪ノ下がちよつと嬉しそうだ。さすがゆりのん。

「少しくらい土日もやんない? 合宿とかみたいで楽しそう!」

「あなた罰ゲームだということを忘れていないかしら……まあ、勉強会の期間は次のテ
ストまでとして、どこかで土日もやりましょうか」

「うん!」

なんだろう、なし崩しに勉強会の形がお茶会に変えられていきそうな予感がしない
もない。ちよろあまのんさん大丈夫ですか。

「デートは……由比ヶ浜さんが決めるべきね。いつがいいかしら?」

「え、あたしが決めていいの?」

「由比ヶ浜さんの報酬だもの。……それに、私と比企谷くんの予定を考慮に入れる必要
はないのだし」

「雪ノ下、お前ちよつと大丈夫か」

「あら、何が?」

なんかさつきから自虐風味を感じるんだが、どっか不安定になってないかお前。

「えつとじゃあ、来週！ 土曜日にくきのん、日曜日にヒッキー！ デートの後ゆきのんちにお泊りして、次の日ヒッキーとデートするの！」

「おお……何と潔い二股宣言」

「私とお泊りしたその足で、他の男のところに行くのね……」

雪ノ下がわざとらしくよよよと目を伏せ口元を手で覆う。

「えつちよつ、えー!？」

「冗談だ」

「冗談よ」

「え……もー!」

ふんすかと擬音立てそうな緩さで由比ヶ浜が怒……むくれる。いや怒ってるんだろうけど怒ってるように見えないんだって。

「……………残りの賞罰は、まあ、由比ヶ浜のデートまでつてことで、いいんじゃないか」
「……………ええ、わかったわ」

最後に残った罰ゲームの履行期を、なるべく意識しないようにささつと決める。

むくれて頬を赤くしてた由比ヶ浜も、今は別の理由で紅潮させているように見えるから困る。

「つつーか……なんかかなりの大事になってないか。ただ軽くゲームをするだけのはず

だったんじゃないのか……」

「……あなた、誰のせいだと……!」

雪ノ下が首筋まで赤くして涙目で睨んでくる。ああうん、負け抜けしようとした俺が悪かったですねごめんさい。でもやつすい喧嘩を高く買う君も悪いと思うのん。

とりあえず雪ノ下が紅茶を淹れなおし由比ヶ浜がお菓子を並べ、全員が落ち着くのを待つて、さてもゲームは始まった。

× × ×

始まったはいいいが、俺も雪ノ下も由比ヶ浜も、なんとなくお互いの顔を見合わせている。落ち着きすぎて先に動いたら負け的な空気になつてねえ? 気の所為?

……ふむ、それじゃあお題も思いついたし先手はいたどころか。

「じゃあまずは小手調べ。『バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発』」

俺のお題を聞くと、由比ヶ浜はにっこ笑つて胸を張る。まあ、簡単だもんなあ。バスガス爆発。

ところでそのポーズ、ちよつと刺激が強いので控えてもらつてもよかですか。

「そんなの簡単じゃん! じゃあ……」

「待つて由比ヶ浜さん。私から行くわ」

だが、由比ヶ浜が回答しようというところで雪ノ下のインターセプトが入る。

止められた由比ヶ浜はキョトンとして、目をしばたたかせる。

「え？ いいけど……」

その返答を聞き、雪ノ下はすつと息を吸い込んだ。

「では……『バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発……』」

「うん、やっぱり簡単だよな」

「『バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発』
どう？」

「え？ そんないつぱい？」

「……雪ノ下、クリアだな」

バレてたかー。まあ由比ヶ浜を止めた時点でわかってたけど。

「由比ヶ浜さん、ルール二。早口言葉は三回繰り返すのよ。だからこの男のお題は『バスガス爆発』九回唱えないとクリアにならないの」

「え？ あっ！ うわっ、ヒツキーするっ！」

雪ノ下の眼光が鋭い。俺の小細工を理解した由比ヶ浜が、一步遅れて糾弾する、つて
ほどもねえなこれ。文句を言う。

「ははは何のことロボ?」

「小手調べだと宣言して容易であると意識を誘導している辺り質が悪いわね」

雪ノ下の方は眼光の鋭さがマシマシになった件。防御力が下がるな。

「えつとじゃあ、あたしも。『バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発バスガス爆発』」

「由比ヶ浜クリアだな。簡単だったろ?」

「言うのは簡単だけど……」

「追求しても詮無いことよ。次は私が出題するわ」

× × ×

「では私も小手調べを。『この子猫どこの猫の子猫この猫の子猫この子猫ね』」

なんだかんだで動き出したからか、雪ノ下は悩む様子もなくお題を出す。思いつかず
にまごついてたわけじゃないんですね。

「小手調べとか言いつつ普通のやつより難易度増してね?」

「え、えーと……ゆきのん、もう一回言つて?」

この子猫云々の早口言葉つてその半分くらいじゃなかった? 由比ヶ浜聞き取れて

ないよ。口には出してないけど実は俺も。

「『この子猫どこの猫の子ここの猫の子猫この子猫ね』」

よし、今度は覚えた。この子猫どこの猫の子？ ここの猫の子猫、この子猫ね。流れるように言われると文節が分かりにくくてしようがない。

「俺先やるわ。『この子猫どこの猫の子ここの猫の子猫この子猫ねこの子猫どこの猫の子ここの猫の子猫この子猫ねこの子猫どこの猫の子ここの猫の子猫この子猫ね』。どうだ？」

「比企谷くん、クリアだね」

猫猫子猫がゲシユタルト崩壊する勢い。ねこねこソフト？ 知らないメーカーですね。

「えーと、えーと……できた。ゆきのん、これでいい？」

そう言つて由比ヶ浜がデッコデコしたガラケーの画面を雪ノ下に見せる。

「あら……ふふ、ええ、それで合っているわ」

ほー、ガラケーにお題を写したのか。よく思いついたなこいつ。

「由比ヶ浜とは思えない見事な発想だな」

「あたしと思えないってなんなのさ!?!」

いやいや、褒めてるのよ？ マジで感心したわ。頭の中のを諳んじると目の前の文

を読むのとじゃ難易度も変わる。

よし、難しそうなお題が来たらこのやり方パクろう。

「由比ヶ浜さん、放っておきなさいそんな男。実際、いいアイデアだと思うわ」

「ゆきのん……。よし、いくよ。『この子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫どこの猫の子猫』ど、どう!？」

その甲斐あつてか、危なげなく言い終える。雪ノ下も満足そうに頷いた。

「由比ヶ浜さん、クリアね」

× × ×

「次あたしかー。んー……」

あ、ガハマさんの方は普通に思いつかずまごついてたんですね。そんな気はしてた。

しかし唸っていた時間はさほど長くなく、秒針が四分の一も回る頃には嬉しそうな顔をぱつと上げる。

「よし、じゃ、あたしもこてしらべ。『赤巻紙青巻紙黄巻紙』っ！ ……ねえゆきのん、巻紙ってなんだろう？」

由比ヶ浜がなんかもうさすがすぎた。なんなら小手調べの発音も怪しかったけど大丈夫なのこいつ？

「あなたは……」

雪ノ下が額を指で抑えてふーつと息を吐く。奇遇ですな僕もちょうどそんな気分です。

「半切紙……紙を継ぎ合わせて巻物のように巻いた紙のことよ。単純に物を巻く紙のこととも指すけれど……」

「平塚先生が吸ってるだろ。あの結婚できない原因の一つ。あれ、紙巻煙草とか、巻紙煙草つつたりする」

ははは、これ聞かれてたらノータイムで一発入れられてもおかしくねえな。

「ほえー……」

由比ヶ浜は感心してるのかなんなのか、ぽけつと口を開けて聞いていた。分かってんのかこいつ。なんかそれ見るとふと心配になった。

「おい由比ヶ浜、お前煙草とか絶対手を出すなよ？ あれ、服毒してるのと変わんねえからな。まして将来のこと考えたら、子供とかにも絶対良くない影響出るし、碌なこと……」

雪ノ下は勧めてくる阿呆とかを完膚なきまでに返り討ちにすること請け合いだが、由

比ヶ浜の場合は強く押されると流されそうな不安がある。

そんな憂慮を胸に滔々と語っていると、どうにも由比ヶ浜の様子がおかしいことに気が付く。開いていた口がきゅつと閉じられ、なんでか知らんが瞳が潤み顔が真っ赤になっている。

由比ヶ浜の艶のある表情に気を取られて忠告の言葉が途切れると、彼女が口の中で小さく何か呟いていることに気が付いた。

「将来……………子供……………」

それが聞こえた瞬間、こつちの顔が火に包まれた。反射的にぱつと由比ヶ浜から顔を背ける。

おい、ちよ、待て。さっきの台詞、忠告じゃなくて命令と取られてないか。あれ、そういう目で見るとかなりの……………。

お前の、じゃなくて……………俺、たち、の、つて……………おとおおとおお……………!

馬鹿じゃねーの! 馬鹿じゃねーの! 何クソ気持ち悪い妄想押し付けてんだよ俺

! バーカ! 俺のバーカ! おい考えんなこの先顔合わせらんなくなるぞ忘れろ!

やべえ、変な笑いが喉の奥から迫り上がってくる。そのせいでまともに喋れる気がしない。脂汗が止まらない。全身が熱をもって脳味噌を焦がす。

落ち着け……………! 落ち着け……………! 深呼吸だひっひっふー、いやそれちげえよつてう

おええええええええええ!!

なんだって現実逃避に選んだものが子供ネタにクリティカルヒットしてんですかね!?! 自分の迂闊さが怖い!

のくみそこねこねコンパイルが頂点に達したとき、凝固点を下回る冷水が如き凍てついた声音が鼓膜に突き刺さった。

「そろそろいいかしら」

「……………ふえっ?」

由比ヶ浜がワントンポ遅れて再起動する。その可愛……………間の抜けた声に釣られて、つい背けた顔を戻してしまう。

結果、真つ赤になった由比ヶ浜の恍惚とした表情を真正面から見ってしまった。

うわ……………これ、ヤバイ。

何がヤバイって……………ヤバイ。ダメだ、脳が茹だってる。言葉が出てこない。

俺の反応で自身の状態を自覚したのか、由比ヶ浜は慌ててパタパタと取り繕う。

「あつ、ごめんゆきのん。えっと、なんだっけ」

「……………『赤巻紙青巻紙黄巻紙赤巻紙青巻紙黄巻紙赤巻紙青巻紙黄巻紙』」

「え? あ……………えっと、ゆきのん、クリア……………」

「……………そう」

なんか知らんが雪ノ下の機嫌がすこぶる悪化してないか。なんでか知らんが。

「あー……雪ノ下?」

「何かしら関白谷くん。楽しい妄想が終わったのなら早く回答したらどうかしら」

ふいと顔を背けて、そっけなく言の葉を投げてくる。

これ、まさか、だけど。……拗ねてる、のか?

いや、まさか、だよな? そうなる要素なかつたよな?

だが由比ヶ浜がバッシバシアイコンタクトを飛ばしてきてる。巻紙はよ言えやつて意味じゃねえよなこれ?

えー、と。もし違ったら速攻で家帰って布団頭から被って力尽きるまで叫ぶレベルの自意識過剰なんだけど。

「雪ノ下」

取り澄ました声を突貫で作り上げ、雪ノ下に呼びかける。

「……………何?」

「あー、その……。お前は強く勧められても由比ヶ浜みたいに流されたりしないだろうけど、お前も煙草とか絶対手を出すなよ? その、子供とか、良くないし……」

でつち上げた鍍金は一瞬で剥がれ落ち、純粋に忠告してたつもりだった先刻とは比にならないほど無様な台詞が途切れながら零れ落ちた。

雪ノ下は何も言わずじっと俺を見つめる。

俺の方も途轍もないしくじった感で何も言えない。

真綿越しに針の筵に包まれて徐々に絞られていくような、身を削る沈黙。

そろそろ土下座が視野に入ろうかというとき、雪ノ下が表情を解かしクスツと笑った。

「吸う気はないわよ。あんなもの、デメリツトしかないじゃない。比企谷くんに言われるまでもないわ」

「お、おう……そうじゃないかとは思ってたが……」

え、これどうなの？ 正解なの？ それともお布団直行コースなの？

判じかねて由比ヶ浜を窺うと、満面の笑みを返してきた。

その笑顔に彼女との一連のやり取りを思い出してしまい、また安定が遠くなる。そう
だ、早口言葉を答えねば。

「あー、俺も答えるぞ。『赤巻紙青巻紙黄巻紙赤ま、きつ、紙青巻紙黄巻紙、赤巻紙青巻紙黄巻紙』」

「うん……ヒツキー、クリアだね。ギリギリ」

あつぶねえトチリかけた。この比企谷八幡に精神的動揺による操作ミスが起こるとは……。

震える手を雪ノ下の淹れてくれた紅茶に伸ばし、湯呑みを一気にクツと傾ける。

程よく冷めた紅茶が喉の奥を滑り、思わず大きなため息が零れ落ちる。少しだけ落ち着けた。

「あ、あのね」

だというのに、直後に由比ヶ浜が首筋まで真つ赤になりながら席を立ち、寄ってくる。嫌な、というには浮ついた予感が襲ってくる。

至近まで近づいた由比ヶ浜は、内緒話をするように耳に口を近づけてほしよと言った。

「あたし、絶対タバコ吸わないから。絶対」

ボツ、と。一瞬で顔が燃え上がった。

何の、とは言わないけど。俺に耐えられる限界を超えた。

真つ赤に燃えた顔を隠すように背け、トイレ行つてくるとだけ言い残して戦略的撤退を決め込むことにした。

3. 「……………もう、私たちの年齢なら、子供は、つくれる、もの」

五分ほどかけて用のないトイレに寄り、特に何も買わないのに自販機を巡って、部屋まで戻る。

扉を引く前に軽く深呼吸して視線に耐える気構えを持つ。しかし入ってみれば由比ヶ浜は俯いて両手を行儀よく揃えた腿においてるし、雪ノ下は文庫本に視線を落としている。

由比ヶ浜が耳まで真っ赤にしていることや、雪ノ下の目線が文庫本の一点から全く動いていないことは気付かなかったことにした。

席に着くと、湯呑みから湯気が立ち上っていることに気がついた。ああ、そっか。出る前に飲み干していったっけか。

目が勝手に雪ノ下を窺うと、ふいと視線をそらされる。……まあ、逸らすつてことはその前はこつちを見てたってことだけだ。

その湯気が少し勢いを落ち着かせたものだと気付くと、沸いて来た罪悪感が胸を擦った。何で俺は用のない回り道なんぞしてきたのかと、後悔が過去の自分を査問する。

ぼーっと展示商品を眺めたあげくスポルトップでも買ってたら擦る程度じゃ済まなかったなこれ。

……いや、うん。善意で淹れてくれたのにお礼をいうのも人としての礼儀というか。由比ヶ浜のマグカップと雪ノ下のティーカップからは蒸気が立っておらず、つまり俺だけのために淹れてくれたということ。

湯呑みを引き寄せ、まだ熱い紅茶を飲んでいることが伝わる程度に音を立てて啜る。

湯呑みで中央が隠された視界の隅、雪ノ下がこちらを気にする気配を発する。

湯呑みから口を離し静かに長机に置く。喉を潤したはずなのに、吐き出そうとする言葉のせいで粘つくような感覚。

「ん…………あ…………うまい」

ピクリ、と雪ノ下が肩を揺らす。

「あ…………、ありがとな、紅茶」

雪ノ下は何も言わないが、文庫本に向けている表情が和らいだ気がした。

「その、いつも…………淹れてくれて」

だからか、余計な一言を加えてしまう。

無茶苦茶な賞罰賭けてゲームしてるからか、距離感が狂ってしまったているかもしれない。パースちゃんと取ったの？

慌てて口を噤んで顔を背けるも、時既に遅し。がつつり聞こえただろう雪ノ下……と、由比ヶ浜もなんか再起動してるんですが。

雪ノ下は由比ヶ浜の熱が移ったかのように真っ赤になり、由比ヶ浜は紅潮を落ち着かせつつも嬉しそうに穏やかな笑みを浮かべていた。

「その……いいのよ」

雪ノ下はページを捲らないままの文庫本から頑として視線を動かさず、口を開く。

「気に、しなくても」

辿々しく重ねる慣れない言葉には、だからこそ彼女の本意が読み取れた。

俺は答える言葉も持たず、ただ黙つてもう一度湯呑みを手に取り、緩やかに傾けた。

× × ×

「さて、じゃあ一周して次また俺だな。……待たせて悪い」

「んーん。トイレならしょうがないよ」

「そうね。トイレなら、ね」

「ごめんなさいね用もないトイレに寄ってきて。用は足してないんです。つーか雪ノ下分かつて突っついてんでらるそれ。分かった上で流してくれるガハマさんの優しさ

をもっと見習おう？　でも完全に無駄に待たせた俺が悪いから何も言えないのん。

「じゃあお題だが……そうだな、『月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月』」

「むむ……長い」

「あら、詠み人知らず？」

「なにそれ？」

「まあそうだが……よく知ってんな毎度」

雪ノ下がふふんと濡羽の髪を手櫛で梳き、ふわっと広げる。そういうのほんと様になるよなこいつ。

「和歌集で作者不明の作品であることを指す言葉よ。誰が詠んだ詩か分からない、という意味ね」

機嫌よく由比ヶ浜に説明する。

「ふーん……せっかくずつと残るようなものが作れたのに、作った人の名前が分かんなくなるってなんかかわいそうだね」

由比ヶ浜は何の気なしに、自分の感ずるままを言ったのだろう、が。

面食らった。

視界の隅に映る雪ノ下も由比ヶ浜を見て目を見開いている。

俺や雪ノ下じゃ十年掛けても出てこない感想だろう。

ほんと、こいつは……。優しさが体の芯に根付いてる、とでも言うべきか。見てて危なっかしく感じるほどに。

「え、なに？ どしたの？」

由比ヶ浜は固まった俺と雪ノ下にキョロキョロと視線を行き来させる。

「いや、なんでもねえよ。……お前、すげえな」

「そうね。なんでもないわ。……時々、簡単に飛び越えてくるのよね」

「ん、んー？ なんかわかんないけど二人だけで通じ合ってる感じのがなんかずるい……」

俺と雪ノ下はそこで小さく吹き出してしまふ。

「あ、ほらまたー！ もー、仲間外れしないでよー！」

「むしろお前が中心だよ。ほれ、はよ言え」

「全然そんな感じしない……。えと、もっかい言つて？ 月々に、月見る月はなんだっけ？」

「『月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月』」

「ちよつと待つて……。……これでもいい？」

由比ヶ浜はてくてこ歩いてきて、少し屈んでガラケーの画面を見せてくる。近い。あとポーズ。

「あ、ああ……あつてる」

「よっし、じゃあ……。『月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月、月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月、月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月、月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月』。ふう」

両手に持ったガラケーを凝視して、途中に息継ぎを挟みつつも危なげなく突破する。

「由比ヶ浜、クリアだな」

「長いけど、長いだけで難しくなかったね」

照れ笑いしながら由比ヶ浜はそう評した。まあ、そうだな。長いだけだ。

由比ヶ浜が席に戻った辺りで、雪ノ下も口を開く。

「では、次は私ね」

「おう、いつでもどうぞ」

特に気負いもせず、十分に肺を膨らませてから詠み人知らずを誦んずる。

俺はおくびにも出さないように注意しつつ、タイミングを計る。

「『月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月々に』」

「ここだ。」

「あ、雪ノ下ちよつといいか」

「『月見る月は多けれど月見る月はこの月の月々に月見る月は多けれど月見る月はこ

の月の月』。……何かしら」

安定の失敗。雪ノ下の眼光が鋭くなる。これ妨害狙いなバレてますわ。まあ雪ノ下相手に成功するとは思ってなかったけど。

ガハマさん相手なら？ 多分罪悪感で死ぬほど簡単に引つかかるんじゃないですかね。

「……いや、なんでもない。雪ノ下クリアだ」

「……そう」

雪ノ下はティーカップに手を伸ばし、しかしそれには口をつけず、続ける。

「長いお題を出して、回答中に呼びかけて、何もないと。そう、言うのね」

「お、おお……」

その発言で由比ヶ浜も俺の意図に気付いたのか、くるりと首をこちらに回して呆れたような目を向ける。

「ヒツキー……また？」

「おいやめろその溜息混じりの苦笑い」

雪ノ下は弄んでいた紅茶を上品に飲み、体温より高めの吐息を一つ。

目を開いて勝ち気な視線を遠慮なしにぶつけてくる。

……とりあえず、俺が雪ノ下を狙ってることはバレただろうか。

まず、俺は雪ノ下に負けたら由比ヶ浜の弁当を一週間。由比ヶ浜に負けたら由比ヶ浜とデート。

改めて何だこの条件。いやまあそれはともかく、つまり俺としては雪ノ下に負けるわけにはいかないということだ。

そして、俺が雪ノ下に勝つたら雪ノ下の弁当を一週間。由比ヶ浜に勝つたら、二人に……うん。

この『俺が由比ヶ浜に勝つたら』、というのがポイントで、つまり雪ノ下としては俺を由比ヶ浜に勝たせるわけにはいかないはずなのだ。

いやまあ俺としては先に由比ヶ浜が負けてもそれほど問題ないんだけど、ほら、その、なに？ 由比ヶ浜なら雪ノ下とやりあう流れ弾で勝手に落ちるんじゃない？

……それに、その、勝つたら……って条件の由比ヶ浜を全力で負かしにいくのって、なんつーか……ねえ？

『そんなに私たちに触れたいの？ ……さすがに気持ち悪いわよ』、とか。

『ヒッキーちよつと必死すぎるかなー……あはは……』、とか。

そんなん言われたら死ぬぞ俺。いや言わないと思うけど。思うけど。

事が事だけに『うわあ……』って感じの反応されるだけでも紐無しバンジーに挑戦しなくなってしまうだろう。

そうなたったら小町が泣いてしまう。……泣くよね？ さすがに泣いてくれるよね？
だから小町を泣かせないためにも先に雪ノ下を倒しにいかねばならんだ。ちなみ
にここまでの流れは童貞乙で大体略せる。

俺は湯呑みで口を湿らせて、雪ノ下のお題を待つことにした。

× × ×

「次は私の番ね。『にゃんこ子にゃんこ孫にゃんこ、曾孫に玄孫に来孫にゃんこ、昆孫仍
孫雲孫にゃんこ』」

「は？」

「ゆ、ゆきのん？」

にゃんこ子にゃんこ言った辺りでああこれか、と思つたが、後半になんか聞いたこと
のない呪文が追加されてた。

雪ノ下は陶然とした表情でにやけている。そんな表情でも様になるつてずるいよね。

「ねこだらけ……」

「なあ、玄孫の後なんつった？ 文脈考えれば子々孫々なんだろうが……玄孫の先とか

あつたのかよ」

「あたしやしゃごつてのも初めて聞いた……」

「あら、由比ヶ浜さんはともかく比企谷くんも知らないのね。普段の文系自慢は鍍金なの？ ふふ……『にゃんこ子にゃんこ孫にゃんこ、曾孫に玄孫に來孫にゃんこ、昆孫仍孫雲孫にゃんこ』よ。」

髪をかきあげながら嬉しそうに詰ってくる。だが実際知らなかった以上言い返すことなどでできやしない。マジで下手な類語辞典より語彙あるんじゃないやねえのか雪ノ下。

「らいそん……こんそん……ダメだ俺もメモるわ」

「あ、あたしも」

由比ヶ浜もガラケーをカタカタ打ち鳴らす。いや鳴らすってほど鳴ってはないか。なお俺より入力速度はずっと早い。

「こんそんの次は？」

「仍孫、雲孫よ。曾孫の次から玄孫、來孫、昆孫、仍孫、雲孫、ね。……何処を一代目とするかでズレるけど、子を一代目とすると玄孫が四代目、來孫が五代目、昆孫が六代目、仍孫が七代目、雲孫が八代目になるわ」

雪ノ下は淀みなく解説していく。日常的には全く使わないことだろうによくまあこんながらがりもせず説明できるもんだ。

「八代目って……猫又かよ」

「猫又には二十年必要でしょう。人間ではないのだから、生後一年かからず繁殖可能になる猫なら同時期に八世代は十分有り得るわ。……見たことはないけれど」

「そんなもん見たことあるやついるのか……？」　つーかやつぱ人間じゃ無理なんだな」

例えて考えてみるに、徳川将軍家十五代の過半を生き延びる妖怪つてことだろ……？
そりゃ無理だわ。

「……世界記録では、自分の昆孫を生きて確認した人はいるらしい、けれど」

先程までの立て板に水が急に滞り、口ごもる。違和感を覚えてスマホから顔を上げると、頬を赤くした雪ノ下がそっぽを向いていた。

その隣では既に入力を終わらせただろう由比ヶ浜も不思議そうに雪ノ下を見て、首を傾げている。

「その、理論上は、現代なら人間でも不可能ではないはずなのよ。人間の寿命は本来百二十を超えているというし。雲孫は八代先、そのサイクルを八回繰り返せば到達するの。無論記録に残すためだけにそんな馬鹿げたことを一族総出で、まして子々孫々に強制していくなんて狂気の沙汰もいところだけど、単純化された思考実験としてなら有り得ることは分かるでしょう？　つまり、その………」

かと思えばそれを誤魔化すように急に視線を戻して捲し立ててきたりと、どうにも安定しない。火照りは首筋まで広がっている。

「……………もう、私たちの年齢なら、子供は、つくれる、もの」

胸を貫かれたのかと、錯覚した。

瞳を潤ませながら恥じらって、耐えきれなくなったかのように戻した視線を再度背ける雪ノ下。

右手は口元でゆるく握られ、震える吐息と戦慄く唇を中途半端に隠している。

左腕は下腹部を抱きしめていて、中々に強い力が加わっているのがここからでも見て取れた。

真つ赤になって呆然と見つめる由比ヶ浜に比べてなお、恥じらう雪ノ下の白い肌に映える紅潮は鮮烈だった。

「う……………わ……………」

由比ヶ浜の眩きが耳を撫ぜる。つい先刻の、緊急避難の原因になった巻紙の話が生々しく蘇る。

由比ヶ浜も同じことを思い出したのだろうか、ちらりと俺を窺って、バツと顔を背けてしまった。一瞬だけ見えたその面頬の紅は、雪ノ下に負けないほど鮮やかに彩られていた。

顔が燃えるように熱い。なに、なんだこれ。

反則だろこんなもの。雪ノ下が、あんな、あんな顔をするなんて…………。

体温だけじゃなく、部屋の室温まで上がっているような錯覚。頭が茹だっているからか、湿度まで上がっているように感じる。

「はっ、」

この場の誰をも焦らすような沈黙に耐えかねたのか、雪ノ下が少しだけ声を裏返して口を開いた。

それを誤魔化そうとしたのか咳払いをして、立ち上がる。

「紅茶のお湯がなくなりそうだから、変えてくるわ」

と言つて、電気ケトルを手にとって足早に部屋を出て行く。そして扉が閉まると、足音は駆け出していた。

その両手で抱えたケトルは、そこまで軽そうには見えなかった。

そして部屋には俺と由比ヶ浜が残される。

……………どうしろと？

なんとなくお互い赤くなつた顔を見合わせる。

目が合つて数秒、由比ヶ浜は苦笑いめいた曖昧な微笑を浮かべた。ごめんなさいこういう時どんな顔をすればいいのかわからないの。

由比ヶ浜から勝手に目が逸れる。それを察してか、由比ヶ浜も明後日の方向に視線を向けてくれる。

無論それが分かるのは視界の端に捕らえてるからであつて、双方実は見てるけど表面上見てませんよというという暗黙の了解でこのむず痒い沈黙は成り立っている。

また部屋の湿度が上がった気がした。雪ノ下、頼むから可及的速やかに帰ってきてくれ。

× × ×

雪ノ下はたつぷり三分程掛けて帰ってきた。

いや分かる。行つて帰つて三分程度なら十分早いのは分かるんだ。

でもこう表現する他ないくらいに長い三分だったんだよ。時計見るたび、『え、まだこんな？』と思つたからな。

目線動かすたびに由比ヶ浜のそれとぶつかったり離れたりしていやもう終わった話はいいんだ。

雪ノ下は入り口の扉を音も立てずに閉めた後、殊更静やかに歩いてくる。

そうして両手で抱いたケトルを台座に戻し、自分の席に着いた。

俺はそつと席を立ち、雪ノ下に近づく。

「にやっ!? んっ……………な、にかしら、比企谷くん」

近寄ってくる俺を見て、雪ノ下の取り澄ました態度が一瞬だけ剥がれ落ちる。雪ノ下が落ち着けていなかったのを知って、なんだかこっちまで落ち着かなくなつた。

「あ……いや、その……お題、これでいいの？」

スマホに打ち込んだ文字を見せて、確認を取る。

「お題……え、ええ。それでいいわ。付け加えるなら来孫は来るに孫、昆孫は昆虫に孫ね。昆の文字には子孫を表す意味があるのよ。仍孫と雲孫はそれであつているわ」

雪ノ下はそつと差し出されたスマホを見て一瞬呆けた顔をしたが、すぐに調子を取り戻してユキペディアさんを披露する。

しかし日本語入力先生は偉大だ。なんで仍孫とか雲孫とかが変換できるんだよ。

「ん……由比ヶ浜も」

「あ、うん。ゆきのん、これでいい？」

「ほぼ平仮名なのね……ええ、それでいいわ。読みは」

「読みがあつてるならいいだろ。ただでさえ容量少ないんだからこんな一生使わんな知識詰め込んでやるなよ」

「す、少なくともいいよ！」

「つーかこれ五十文字超えてんじゃねえの？ ……うわ、ギリ超えてねえ」

「そんなミスしないわ。ふふ……ねこだらけ……」

雪ノ下はふにやんと頬を緩ませる。よし、今度こそいつものペース。

「じゃ、いくぞ。『にやんこ子にやんこ孫にやんこ曾孫に玄孫に來孫にやんこ昆孫仍孫雲孫にやんこにやんこ子にやんこ孫にやんこ曾孫に玄孫に來孫にやんこ昆孫仍孫雲孫にやんこにやんこ子にやんこ孫にやんこ曾孫に玄孫に來孫にやんこ昆孫仍孫雲孫にやんこ』……。どうだ？」

「比企谷くん、クリアだね」

「おう」

長い長い早口言葉としての難易度が高いわけじゃなかったしな。使い慣れない単語がいくらか混じってたが、それもメモ見ればただの音読になる。改めてすげえな由比ヶ浜。よく気付いたわ。

「あたしもやるね。『にやんこ子にやんこ孫にやんこ、ひ孫にやしやごにらいそんにやんこ、こんそんじようそんうんそんにやんこ、にやんこ子にやんこ孫にやんこ、ひ孫にやしやごにらいそんにやんこ、こんそんじようそんうんそんにやんこ、にやんこ子にやんこ孫にやんこ、ひ孫にやしやごにらいそんにやんこ、こんそんじようそんうんそんにやんこ、にやんこ子にやんこ孫にやんこ、ひ孫にやしやごにらいそんにやんこ、こんそんじようそんうんそんにやんこ』！ どうかな？」

「由比ヶ浜さん、クリアだね」

ふふんと由比ヶ浜は胸を張って得意顔。俺はそつと目を逸らす。

……だから、無防備すぎるんだっての。お前は。

× × ×

「あ、次あたしか」

上機嫌でさくさくお菓子をつまんでた由比ヶ浜が順番を思い出したのか、手を止めて少しだけ考える。

「ん、んー……『集中、中級、手術、注意報』？」

なんか照れながら、なのか？ これ。うつすらと頬を赤くしながらガハマさんが一語区切りながらお題を言い切る。

……その頬の紅とお題の発音、何より少し前に真正面から見てしまった表情のせいで、一瞬キスを待っているのかと錯誤してしまった。

俺の脳味噌はもしかしたら腐ってるんじゃないだろうか。まさか目から伝染ったのか？ むしろピンク色に侵されてないか。大丈夫か俺の脳。

「みじ、かいし、難しくもないな」

「う、うん……。そうかも……」

由比ヶ浜も何故か受け答えがぎこちない。手指の先端を合わせて、覗き込むような上

目遣いで注視してくる。これは……口元？

確認するように身じろぎするも、やはり視線はそこから離れない気がする。

なんとなしに雪ノ下を確認すると、どうにも彼女も同じところを見つめているように思えた。

「……なに、なんなの」

「えっ？ いや、なんもないよ？」

「……そうね、特に、何も」

パタパタと突き出した両手を振って否定する由比ヶ浜に、一時的に目を逸らして追従する雪ノ下。

だが由比ヶ浜の視線は動かないし、戻ってきた雪ノ下の視線もやはり変わらぬ位置に注がれている。

言葉にし難いやりにくさを感じつつも、お題の消化に挑む。……もしかしてこれ、俺がさつきやつた妨害工作の亜種なの？ くっ、やるじゃねえか。

「……あー、やるぞ。『集中中級手術注意報集中中級手術注意報集中中級手術注意報』判定を求めて由比ヶ浜をちろりと見る。由比ヶ浜は少しの間潤んだ目でぼーっとしていたが、見られていることに気付くと慌てて答える。

「あ、えと、ヒッキークリアー！」

なんかほんとに聞いてたのかお前って感じの反応だけど大丈夫だよな？

ともあれ、クリアしたことに変わりはない。後は雪ノ下だ。まあこんな簡単なお題で雪ノ下がミスるとは思わないが。

そう思つて雪ノ下を見ると、僅かに動揺したように目を泳がせて黒板の方を見た。

由比ヶ浜も俺に釣られてか、雪ノ下を見やる。

「……私も、始めるわね」

そう言つて、軽く息を吸う。どうにも気負っているように見えるが気のせいだろうか。

「……『集中中級手術注意報集中中級手術注意報集中中級手術注意報』」

ぎこちなさはあるものの、躓く事なく言い切った。

……こいつ唇つややかで綺麗だなとか思いながら見てた俺の脳味噌は大丈夫じゃないようで。

お題を決めた由比ヶ浜よりも三倍長かっただけに、三倍脳裏に焼き付いている。ごめん嘘。区切りながらゆっくり言つてたガハマさんの方もおんなじくらい焼き付いてる。

「うん、ゆきのんクリア」

「……………」

赤い顔を背けた雪ノ下にこの煩惱が筒抜けなんじゃないかと思うと、自然俺の方も顔

を背けてしまっていた。

4. 「あら、私たちは今遊んでいるのでしよう?」

「で、また俺か」

「……………」

心なしか雪ノ下の眼光が鋭くなる。警戒されてんなあ。

「もう三巡目なのに全員ノーミスなんだな」

「そんな簡単に負けないよ!」

「まだ……………いえ、もう、ね……………」

由比ヶ浜は元気に、雪ノ下は疲れたように返す。

……………まあ、こんなゲームだ。普通なら三巡なんぞすぐだろうが、何故か時間が通常の数倍、精神力に至っては数十倍削られてるわけで。何故か。

どうしたものか。頭を捻ってみる。

……………よし。これで行こう。

『るろPほほとけUはとBほまははD』

「え、な、なに?」

「今なんと言ったの?」

由比ヶ浜も雪ノ下も豆鉄砲食らった顔をしている。そりやそうだ。

「『るろPほほとけUはとBほまははD』」

「何それ？」

「昔のゲームのパスワードだな。なんとなくまだ覚えてた」

要は不規則な文字列だ。ゆうていみやおうなんぎ目じやないぞ。本当に何一つ規則性ないからな。

「ちよつとヒツキー……それはさすがに……」

由比ヶ浜の頬が引きつった。でもしようがないんだ。思いついちやったんだもん。

「信じられるか……？ ゲームにセーブ機能とかなかった時代があつたんだぜ……」

「ヒツキーのやり方のほうが信じらんないよ……」

いや、俺もそう思う。なんなんだろうなこいつ。俺のことだが。

「……いくらなんでも無意味な文字の羅列は反則でしょう。その斜め下すぎるあなたのやり方、嫌いだわ」

溜息ついて頭を振る雪ノ下。あ、呆れ通り越して軽蔑になってますねこれ。

「……比企谷くん、私と由比ヶ浜さんがもういいと言うまで蓄音機になつていなさい」

「備品扱いも極まれりだな。『るろPほほとけUはとBほまははD』……つーか、これメモの読み上げになるんなら捻った意味全くなくなるよな」

「るろぴーほ……なんでそれが分かっててこんなお題選んじやうかなあ……」
「全員が面倒なだけで誰一人得るものがないのよね……」

だってしようがないじゃない。思いついちゃったんだもん。

その後何度か再生を繰り返して、まず由比ヶ浜からお許しを得る。

ガラケー片手に由比ヶ浜が近づいてきたので、屈まなくてもいいように立ち上がってこっちから受け取りに行く。

「あ、ありがと……」

「いや、まあ……」

ちよつとポーズがあれだから受け取りに行つたとか言い辛すぎて口ごもる。

ガラケーを見る。アルファベットが平仮名になっていた。いやまあ、発音的に正しければ問題ないのでいいんだが。

「ん……発音的には合ってる。これでいいぞ」

「わかった」

由比ヶ浜にガラケーを返却し、た、瞬間、互いの右手がほんの僅か触れてしまつて硬直した。

幸い携帯電話を落とすことはなかったが、運が悪ければどうなつてたか分からない。

「わ、悪い」

「う、ううん。あたしもだし」

由比ヶ浜は左手にガラケーを持ち替え、右の掌をじつと見たまま、ゆるくにぎにぎとさせている。

その仕草がどうにもむず痒くて、自分勝手に急かしてしまう。

「じゃ、じゃあ」

「あ、う、うん……やるね。『るろぴーほ、ほとけゆー、はとびーほ、まははでいー、るろぴーほ、ほとけゆー、はとびーほ、まははでいー、るろぴーほ、ほとけゆー、はとびーほ、まははでいー』。……言えた、かな？」

由比ヶ浜はゆっくり焦らず、区切るようにお題を消化した。

……なるほど、そういうええルールには早口言葉を早口で言わなければならない、とはなかったな。時間制限がないということは間違えさえしなければいいわけだ。

…………ますます早口言葉からは遠のいてないか？ これ。いや、それはともかく。

「由比ヶ浜、クリアだ」

「あ、言えてたんだ……よかった」

由比ヶ浜はほっと胸をなでおろす。いや、物理的な意味じゃなく、慣用表現的な意味でね？

「しかし由比ヶ浜がメモ書き思いつく前の一発目でバスガス爆発の代わりに入れてたら

ワンミス取れたかね？」

「いや、思いついてなくてもこんなの聞いたたら普通メモしようって思うよ……」

ぼやくように言ったら、苦笑が帰ってきた。さもありません。

由比ヶ浜は踵を返して席に着く。しかし、雪ノ下は……。

「お前メモってないみたいだけどいいのか？」

こいつ、さつきから腕を組んだまま動かないでいるのだ。

「あれ、ゆきのん書いてないの？ あたしの見る？」

そう言つて由比ヶ浜がガラケーを差し出す。だが、雪ノ下は掌を立ててそれを押しと

どめた。

「いえ、大丈夫よ。……比企谷くん、最後にもう一度蓄音機になりなさい」

「……お前まさか。『るろPほほとけUはとBほまははD』……。これでいいか？」

「ええ、もういいわ。では、行くわよ……。『るろぴーほほとけゆーはとびーほまはは

でいー、るろぴーほほとけゆーはとびーほまははでいー、るろぴーほほとけゆーはと

びーほまははでいー』……。どうかしら？」

「……………マジか、お前」

アホだ。こいつアホだ。十六文字、あるいはアルファベットを平仮名と見做すなら二十文字以上、この短時間で覚えやがった。覚える利も覚えるための取っ掛かりも何一つ

ない文字列覚えきりやがった。

「……………」

雪ノ下は黙ってじつと判定を待っている。

「……………雪ノ下、クリアだ」

その裁定に、雪ノ下はぐつと小さくガッツポーズを取った。

「ゆきのん……………すごい……………」

「いや、凄いは凄いが……………」

何だこの果てしない能力の無駄遣い。どういう頭の作りしてるんだお前。

「ふふ……………比企谷くんのそのやり方がいつまでも通じるとは思わないことね」

雪ノ下は腕を組んで、嬉しそうに笑いかける。

「真正面から叩き潰してあげるわ」

その笑顔で物騒な思考語るの、やめてもらえませんかね？

× × ×

次は雪ノ下の番なのだが、初めて何事か考えている様子。今まではノータイムで出題していたのにな。猫ネタ尽きたか？

「そうね……。『子子子子子子子子子子』」

「あ、今度のはそんな難しくもないんだね」

「……………」

と、思ったらこれだよ。よくまあこんなもん引つ張り出してきたな。

「あら、比企谷くんは知っていたのね」

「え、何を？」

「これ、早口言葉に持ち出す内容じゃないだろ」

「別に構わないでしょう。何に違反しているわけでもなし。……というか、あなたに言われる筋合いはないわよ」

「ねえ、何をなの？」

ごもつとも。ゲームのパスワードなんかよりはずつとまともなお題だしな。

由比ヶ浜が俺に疑問を込めた視線をやったり雪ノ下の袖を引つ張って尋ねてくるが、相手しないでいたら拗ねてしまった。

「むー……なんかあたしだけ蚊帳の外……」

「おお、由比ヶ浜蚊帳の外なんて言葉知ってたんだな」

「バカにすんなー!」

うがーつと全身で怒りを表す由比ヶ浜だけど微笑ましすぎて迫力欠片もないんだよ。

たらずぐにほにやつと表情をふやかした。

ゲーム終わって帰る頃にはもう忘れてそうだって思った俺は、多分悪くないよな。これ。

× × ×

そして次は頭を撫でられて上機嫌に蕩けてる由比ヶ浜、なのだが。

「調べる……調べもの……ねえ、難しい早口とか調べるのって、あり？」

さっきの話が頭に残ってるのか、そんなことを言い出した。

「ありだと思うか？」

「うう……だよねえ……」

そう言つて肩を落とす由比ヶ浜。疑いもせず項垂れるその姿を見ると良心が疼くな。

「由比ヶ浜さん、騙されているわよ。彼、由比ヶ浜さんの質問には答えていないもの」

「へ？」

「比企谷くんは由比ヶ浜さんの『調べ物をするのはありか』という問いに対して『ありだと思ふか』と問い返すのみに留めて、ありともなしとも言っていないのよ。詭弁の一種ね」

そう言つて雪ノ下はちろりと睨めつける。

「というか、自分は散々ルールの境界を跨るような真似をしておきながら由比ヶ浜さんのそれは認めない、などという道理は通らないでしょう」

「え、えつと……話が難しくてよく分かんなかったんだけど……ヒツキーが嘔吐いてて、ほんととは調べていい、つてこと?」

首を傾げて由比ヶ浜が雪ノ下に縋るように問いかける。

「嘘は吐いてねえぞ」

「ええ、嘘を吐かずに騙そうとしたのよね」

「嘘を吐かないで嘔吐くの? どういうこと?」

その由比ヶ浜の発言に、思わず俺も雪ノ下もまじまじと彼女を見つめてしまう。

「……………私、由比ヶ浜さんがいつか悪人に騙されるのではないかと心配になってきたわ」

「……………奇遇だな。俺もだ」

不安で頭が痛くなる。雪ノ下も俯いて頭を振っていた。

はてなマーク頭に出してる由比ヶ浜が無垢すぎてヤバイ。下手すると時そばにも引つかかっちゃうんじゃないのこの子。

「後でじっくり教えてあげるわ。それより由比ヶ浜さん、この先何か大きな決断をする

ときは、絶対に私と比企谷くんに相談して。いい？ 絶対よ？ 約束してちょうだい」

「え？ え？ う、うん……。迷惑じゃなければ……」

「ああ、そうしてくれ……。気が気じゃないわ……」

キョトンとしてた由比ヶ浜が、ふと何事かを考える。

少しして顔を上げ、口を開いた。

「……ねえ、それって、いつまで？」

「いつまで、って……」

「……一生？」

由比ヶ浜が上目遣いで問うてくる。

……その質問の意味を、深読みしそうになってしまう。

「……ま、あ。そう、だな」

一生涯、大切なことを相談できる間柄でいようと。そう願っているのではないかと。

「……そうね。由比ヶ浜さんが嫌でなければ、一生ね」

「嫌じゃないよ！ 嫌なわけないじゃん！」

「あ……もう」

由比ヶ浜は雪ノ下に抱きついて、頭をぐりぐりと擦り付ける。

雪ノ下はそんな由比ヶ浜を愛おしそうに撫ぜている。

一生、か。

この先本当にずっと一緒にいられるかはわからないけれど、それでもできるだけ、そうあれたらいいと。そんなことを思いながら、俺は湯呑みを傾けた。

× × ×

さて、横道に逸れはしたが、由比ヶ浜の番である。が。

「んふふ」

「ふふ……」

ゆるゆりしてて進まねえ。二人の仲が良すぎて眼福です。止める気？ ねえよんなもん。

ぼーっと紅茶飲みながら眺めてると、由比ヶ浜が先に正気に戻った。

「あ……あたしの番だっけ」

「おお、思い出したか。で、どうするんだ？」

「あ、ごめん。ちよつと待ってて。調べていいんだよね？ 難しいの探すから」

そう言つて由比ヶ浜は長机に突っ伏し、ガラケーをカタカタ動かす。

「ふーん……早口言葉って色々あるんだねー」

独り言かどうか微妙な声量で由比ヶ浜が呟く。ガラケーから視線上げてないし独り言でいいのか？

「あ、これにしよ！ 難易度十だつて！」

などとぼつち思考巡らせてたら、由比ヶ浜が元気よく跳ね上がった。何だよ難易度十つて。基準不明だから分かんねえよ。

「ふふん、行くよ？」 『新出シャンソン歌手シヨ！出演新春シャンソンシヨ！』 ね

！ ね！ 難しいでしょ！」

「……………」

「……………」

雪ノ下の顔をちらりと窺う。ニィつと笑みが返ってくる。ダメだこいつやっぱ一発で覚えてるわ。さつき見せた記憶力は伊達じゃねえな。

「いや、まあ、そうだな。難しいな」

「じゃもつかい言うね？ 『しんしゅ……』」

「いや、いい」

と、由比ヶ浜が言い出しそうになったところで掌を立ててそれを止める。

「え、つと。ヒツキー？」

「読み上げはいいから、お前のガラケー見せてくれるか？ 検索したんだろ？」

そう言つて席を立ち、由比ヶ浜の席まで歩いていく。

「あ、そっか。あたしが読み上げなくてももう書いてるもんね。はい」

由比ヶ浜は携帯を渡してくれる。その笑顔を見て、迷わず人に携帯渡せるのが凄いなと言つていた昔を思い出した。

お題を確認する。……まあ、やっぱそうだよな。で、そことそこか。

あれだな。これはゆっくりじっくり消化すべきだ。早口言葉を早口で言わなきゃいけないルールはない。自分でも何を言っているのか分からないが。

「行くぞ。『新出シャンソン歌手、しよう出演、新春……』」

「あ……」

と言つた辺りで、由比ヶ浜の嬉しそうな感嘆詞が聞こえた。小さく抑えてはいるが、いかにも堪えきれないといった感じの。

『シャンションショー、新出シャンソン歌手、しよう出演、新春シャンションショー、新出シャンソン歌手、しよう出演、新春シャンションショー』……。どうだ？」

それに気を取られつつも、ゆっくり確実に最後まで言い切つて確認を取る。

にこにこ顔の由比ヶ浜でなく、雪ノ下に。

「ヒッキーミスったね！ やっぱ難しかったでしょ？ ふふ、やった！」

「いいえ、クリアよ」

「えっ？」

それを聞いて、肩の荷が下りる。ふう、と大きな吐息。

「え？ え？ どうして？」

「だって、由比ヶ浜さんはそういつていたもの。あくまで出題者のお題を三回繰り返し返すことが回答者の義務だから、由比ヶ浜さんが出題する時に間違えると私たちの回答もそれに準じなくてはならないのよね……」

「おつまえナチュラルに難易度上げてくるよなあ……。本人が意図してないのが何よりひでえ。いや、対戦形式のゲームとしてはこの上なく正しいんだろが……」

ちなみに本来のお題は新出シャンソン歌手総出演新春シャンソンショー。由比ヶ浜のリピートを停止したのは、もう一度言わせてたら別のところでミスったりしてどこ間違えたか分かんなくなつてごっちゃになりそうだったからだ。

……っーかこれ、同じお題出したら由比ヶ浜クリアできないんじゃないの？ いや ゆっくり言つて突破するだけか。あれ、このゲーム構造上お手つきしよすがなくなつてねえ？

「では私も。『新出シャンソン歌手ショー出演新春シャンソンショー新出シャンソン歌手ショー出演新春シャンソンショー新出シャンソン歌手ショー出演新春シャンソン歌手ショー新出シャンソン歌手ショー出演新春シャンソン歌手ショー出演新春シャンソン歌手ショー出演新春シャンソン歌手ショー』

シヨンシヨール』……。どうかしら？」

途切れも淀みもなくきつちり早口言葉として言い切り、自信に満ちた目で俺に確認を促してくる。由比ヶ浜じゃなくて俺に。

「雪ノ下、クリアだな」

「あたしのお題なのに……」

由比ヶ浜自身が正しくお題を認識してないからね。しょうがないね。

つーか雪ノ下これどうやったらミスるんだ？ スペックが高すぎてミスらせられる気がしない。無敵じゃねえか。

これで三巡。誰一人として落ちる気配もなかった。

5. 「うわあ……ゆきのん本気だ……」

さて、巡り巡って俺の番。んー……どうするかな。そろそろ搦手も出尽くしたが。別視点から考えてみるか。

まず、メモと時間無制限のせいで真つ当な早口言葉や難解な暗号では落とせない。それがあってなお早口……早口じゃねえよなあやっぱ。復唱要求を失敗させるには。

つまり、バスガス爆発三回みたいに早口言葉の内容を誤解させるか、途中で呼びかけるなりして意識の外から邪魔を入れるか、それとも……。

「……よし」

お題は決まった。……気は進まないが。

「比企谷くん、決まったようね」

雪ノ下が俺に向き直って、不敵な笑みを見せつける。

その目をじっと見つめ返して、口を開いた。

『猫猫子猫舐めて糶して三味線三昧』

雪ノ下の顔が驚愕に歪む。

「あなたという人はどこまで……いー」

「え？ またなんかやったのヒツキー？」

「いいや？ 特に何も？」

「いやいや、それが嘘だつてのくらいわかるから。ゆきのん超悔しがってんじゃん」

さて何のことやら。雪ノ下から睨めつけるような抗議の視線がびしばし飛んできてるけど気にしないこととする。

「いや、実際何か引つ掛けとかがあるわけじゃない。なんならメモ不要なレベルで簡単だろ？ 『猫猫子猫舐めて糺して三味線三味』。ほれ、言ってみ？」

「う、うん……。『猫猫子猫、舐めてなめして三味線さんまい、猫猫子猫、舐めてなめして三味線さんまい、猫猫子猫、舐めてなめして三味線さんまい、猫猫子猫、舐めてなめして三味線さんまい』……。言えた、よね？」

「ああ、由比ヶ浜クリアだ」

「あれ……。えつと……。ゆきのん、難しくなかったよ？」

由比ヶ浜は雪ノ下の方を向いて、首を傾げる。

だが雪ノ下は口惜しそうに顔を俯け、長々と葛藤してからようやくやつと声を押し出す。

「……………パス」

「えっ！ ええっ!?! なんでっ!?!」

やったッ！ 勝ったッ！ 仕留めたッ！ 長机越しに見えないように配慮しつつ、ぐつと小さくガッツポーズ。

どんなお題出してもすぐさま今ので覚えたしてくるからなこいつ。絶対に勝てんの
 だっと思つてたから嬉しきも一入。

「雪ノ下、アウトだな」

雪ノ下が臍の代わりに親指の爪を浅く噛んで、睨んでくる。

「えっ、ちよつ、ゆきのん、ヒツキー、なんで？」

「……別に、なんでも、ないわ」

「だ、そうだ」

「え、えー……。全然なんでもなくない……」

ガハマさんが声を小さくしながらも弱々しく抗議する。

「なんでも、ないわ。……次に行きましょう。比企谷くんを仕留めてあげるから」

怖えよ。あと怖い。由比ヶ浜も怯えてんぞ。

× × ×

雪ノ下が凄絶な笑みを浮かべて口を開く。

『『小町に恋人ができた、祝福しよう』』

「ぐっ……！ 雪ノ下、お前……！」

「うわあ……ゆきのん本気だ……」

こいつ、的確に俺の急所を抉ってきやがった……！

「別に引つ掛けがあるわけでもないし、元よりメモも不要な程度には簡単でしょう？」

『小町に恋人ができた、祝福しよう』。どうしたの？ 比企谷くん」

完全に当て擦られるぞ俺。なんて陰湿な……そういうのは俺の領分だろうが……。

猫が獲物を囀るような微笑みで追い詰めてくる。

「……………猫縛りしてたわけじゃなかったんだな」

「そうね。それが？」

くっ……………！ ダメだ揺さぶりにもなつてねえ……………！

「くそっ……………！ パスだ……………！」

「ヒツキーもヒツキーだった……………」

「ふふ……………比企谷くん、アウト」

雪ノ下がそれはもう嬉しそうに宣言する。くそっ！ くそっ！ 俺の妹愛を利用し

てお手つきを奪っていくなんてなんと卑怯な！

あ、ここ大ブーメラン会場です。しかしこれで俺↓雪ノ下↓由比ヶ浜0か。まさかの

由比ヶ浜優位という予想だにしなかった事態。俺とだけ由比ヶ浜を舐めてるんだろ
う。

「でもヒツキー、小町ちゃんが本当に好きな人できたら、ちゃんとお祝いしてあげなきゃダメだよ？」

「いらん。小町が好きなのは俺だ」

「……でも、ヒツキーは小町ちゃんと付き合うわけじゃないでしょう？」

覗き込むような上目遣いで、由比ヶ浜が問うてくる。少し頬は赤く、ひたと見つめる目には力があり。……ちよつと、そんな顔でそういうこと聞いてくるのは……その、ズルくない？

「小町ちゃん、ヒツキーのこと絶対好きだから、ヒツキーが嫌がったら好きな人のこと表に出せなくなっちゃうかもしんないし……」

由比ヶ浜は小さく息を吐き、正面から目を合わせてくる。

「それに、ヒツキーだって……」

しかし、続く言葉は窄んでいつて、そのまま消えてしまう。一度は合わせた視線も、お互いに顔を背けることで完全に外れる。

全くもつて、部屋が暑くてたまらない。顔も頭も茹だつてしまいそうだ。

「は、早口言うね！ 『小町に恋人ができた、祝福しよう、小町に恋人ができた、祝福しよう、小町に恋人ができた、祝福しよう、小町に恋人ができた、祝福しよう！』」

「はい、由比ヶ浜さんクリアね」

「ふう……」

由比ヶ浜は火照った顔を冷ますように、息を吐く。

そして、改めて俺に向き直り。

「ヒツキー、ちゃんと祝福してあげなきゃダメだよ?」

そう、繰り返した。おう、だの。ああ、だの。そんな答えになつてないような答えを返すのが精一杯だった。

× × ×

俺と雪ノ下が終わって、由比ヶ浜の番なのだが。

「んー……言いくらいなもの、言いたくないもの……」

どうもさっきの雪ノ下のお題から、着想を得てしまったらしい。傍迷惑な。

お菓子をばくつくつく手も止めて、何かないか何かないと頑張つて考え込んでいる。普段の勉強もこれくらい頑張りやなあ……。

「あー!」

そして何事か思いついたようで、嬉しそうに声を上げて手をぼむと打ち合わせる。

さて、俺向きか雪ノ下向きか。この手の嫌がらせが苦手そうな由比ヶ浜が何を出して

くるのか、余裕半分期待半分で待つてみる。

ちらりと雪ノ下を見ると目が合った。その表情からおんなじようなことを考えているのだろうか伺えた。

由比ヶ浜が、口を開く。

『ずっと前から好きでした。俺と……付き……』……ごめん、これ変えていい？』

「……………おう」

「……………ええ」

最初思いついた喜びでのほしやぎっぷりから地の底までテンションが落ちていく様
がいつそ笑えるほどだった。

ああうん、いつそ笑い話にでもしなきゃ耐えられないくらいにみんなのトラウマざつ
くり抉ってるんです。はい。

凄えよ。一瞬で空気がお通夜になったもん。今全員が全員目え逸らしてるし。元凶
としては蝦蟇より濃い脂汗を垂らす他ない。

なんだろう、自分一人で済まないトラウマがここまで凶悪なもんだとは思ってなかつ
た。死にたい。

無邪気で考えなしだからこそストッパーもなく、くびをはねられた！ 一撃を繰り出
せるのか。怖え。

「……………」

「……………」

「……………」

誰も何も言わない。どうしよう、空気が重くて息ができない。

ちろりちろりとお互いを探るように盗み見るが、三人共そんなことしているせいで視線がかち合つてはバツと背けることを数度繰り返す。

「あー……あはは、ごめんね？ 変な空気にしちゃつて」

飽和した気まずさを最初に破つたのは、やはりというか由比ヶ浜だった。

こいつのこういうところは、本当に凄いなと思う。

「……………いや、そもそも原因俺だしな」

見せつけられて思い知った辛さ。主観的な完全性のみ固執して、そんなものを二人に背負わせてしまった後悔が胸を苛む。

もう一歩足を進めて考えてみる。由比ヶ浜が、あるいは雪ノ下が、好きでもなんでもないやつに告白するのを目の前で見せつけられる。

……………ね、死にたくなるでしょう？

ましてそんな告白が成立してしまつて、告白した義務感から付き合うとか……………おおう……………もう……………。

無論俺と二人の告白の価値には天地ほどの差があるが、それを差し置いてもそんな思いをもうしてほしくないと思う。

「ほんともう……なんというか……浅薄でごめんなさいとしか……」

あ、これ駄目なやつだ。由比ヶ浜を泣かせてしまったことをまざまざと思い出して底抜けて気分が落ち込む。

背もたれに荷重を掛け、死んだ目で見るともなしに二人を見てみると、由比ヶ浜が俺のゾンビっぷりを見て慌てている。

あかん、ただでさえ色々と背負わせてんのにこれ以上心労かけてどうする。

「え、えと、えと……。あ、そういうえば。もしかしてさっきのヒツキーのやつも、ゆきのんが言いたくないことをお題にしたの？ あのスミ線のやつ」

なんとか言葉の接穂を探したのか、由比ヶ浜が俺と雪ノ下の刺し合いからそんなことを聞いてきた。

せつかく投じてくれた助け舟、縁に縋ってでも乗り込みにかかる。

「あ、あー……。そう、だな。由比ヶ浜、お前三味線の材料って知ってるか？」

「材料？ どういうこと？」

一度会話の流れが成立したら、その後の言葉は割とすんなり続いてくれた。

「……何から作られるか、って意味だが」

「材料の意味くらいわかるよ！ え、なんか木とか糸とかじゃないの？」

「いやまあ、それも使われてるんだろ？が。他にも一色が被ってるものが使われててな」

「へ？ んー……ごめん意味わかんない。いろはちゃん帽子とか被らないよね？」

「猫だ」

「猫？」

「その……なんつーか、例えばワニ革の鞆みたいにな、猫の皮を材料にしてるんだよ」

「えっ……それって……」

「だから雪ノ下は嫌がったんだな」

「うわあ……ヒツキー……うわあ……」

ガハマさんの笑みが引きつる。……うん、まあ、我ながら酷いかなーとは思わなくてもなかつたけど。そこまでかー。

だが、呆れと苦味が混じるその笑みには暗く沈むような色はもうなかつた。

俺たちのやり取りを横目に見ていた雪ノ下も失笑を漏らしている。

先程の空気が払拭されたことで、安堵の感情が胸を満たす。

あ、そうだ。話題にも出たしちょうどいいだろ。

「雪ノ下。紳士協定の提案があるんだが」

「……いいわ。猫よ」

当意即妙。この辺の回転はさすがの雪ノ下だ。

「小町、戸塚。……パンさんはいいのか？」

「何かを貶める方向の内容には触れない、ということにしましょう」

「了解だ」

というわけで、懲りずに別の搦手を考えることとしよう。

× × ×

「んー……うーん……」

そして改めて由比ヶ浜。お題の変更先に腕を組んで頭を悩ませている。

「あー！」

と、いいアイデアが閃いたのか笑顔がぱつと花開く。さつき見た流れですねこれ。

大丈夫だと分かっているのにそれでも自分に言い聞かせる部分があるのは、さつきのトラウマ想起が尾を引いてますね。少し身体が固くなってるのが自分で分かった。

「ね、お題はなんでもいいんだよね!? じゃ、じゃあ『二人はあたしのことどう思っていますか?』」

……おお、すげえな由比ヶ浜。脱力で緊張が完全に吹っ飛んだわ。

雪ノ下も指先で額を押さえ、溜息を吐いている。

「ど、どうかな?」

『二人はあたしのことどう思っていますか二人はあたしのことどう思っていますか二人はあたしのことどう思っていますか』

「あ、あれー?」

思いついたことを口から出す前に、一度推敲するのを習慣づけたほうがいいんじゃないかなって八幡思います。

「で、どうなの?」

「え、あ、うん……。ヒッキークリア……。お、おかしいな……。こんなはずじゃなかったのに……」

「ふう……。『二人はあたしのことどう思っていますか二人はあたしのことどう思っていますか』。これでいいわね?」

雪ノ下がまた軽く溜息を吐いて、さらりとお題をクリアする。

「う、うん。いいんだけど……。あれー?」

由比ヶ浜は何が悪かったのかと腕を組んで考える。

その、大変言いにくいんですが多分お前の頭じゃないかなって。

× × ×

「じゃ俺か。んー……『ピザって十三枚、じゃなくて十三回言って？ 早口で』
ちよつと簡単すぎたか？ 雪ノ下なんかキョトンとしてるんだが。」

由比ヶ浜が下手の考えを止めてこつちを向く。おや、満面の得意顔。

「ふふつ、そんなんじや引つかかんないよー。あたし先やるね？ 『ピザって十三枚、
じゃなくて十三回言って？ 早口で、ピザって十三枚、じゃなくて十三回言って？ 早
口で、ピザって十三枚、じゃなくて十三回言って？ 早口で』。どう？」

「……由比ヶ浜、クリアだ」

やつぱり簡単すぎたようだ。ネタが枯渇してるな。どうしよう、これ以上どうやった
らお手つき奪えるのか。

「つていうかヒツキーがお題で引っかけようとすの二回目じゃん。いくらあたしでも
引つかかるわけないし」

「そうだな。いくら由比ヶ浜でも引っ掛かるわけないよな」

「そうよ。いくら由比ヶ浜さんでも引っ掛かるわけないわ」

「どーいう意味だ!?!」

由比ヶ浜が両手を突き上げて心外だとばかりに抗議する。おいおい自分で言ったこ

とじゃねえか。

クスツと笑った後、雪ノ下が軽く咳払いして注意を集める。

『ピザって十三枚じゃなくて十三回言って早口でピザって十三枚じゃなくて十三回言って早口でピザって十三枚じゃなくて十三回言って早口で』

淀みなくすつと言いい切り、判定を乞う視線を向ける。

「雪ノ下、クリア」

黙って目を閉じ、満足そうな笑みを浮かべた。

このお題、完全に不発だったな。色々迷彩も施したつもりだったが何の意味もなかった。

これこのまま誰もお手つきせずに下校時刻迎えたらどうなるんだろう。ノーゲーム？ コールドゲーム？ それともまさか場所変えて続行とかないだろうな。

目の前でむくれながらマグカップを傾ける女の子と、微笑みながらお菓子に手を伸ばす女の子を見て、そんな疑問が頭を過ぎった。

× × ×

雪ノ下の番だ。雪ノ下は拗ねる由比ヶ浜を見て、また一つ笑みをこぼす。

「じゃあ、次は私のお題ね。……『ずっと一緒にいて欲しい』」

照れくさそうに頬を染めながらも、凜として言い切った。

それは、由比ヶ浜のお題に対する雪ノ下の回答。

「ゆきのんっ……!」

「あ……、もう」

由比ヶ浜は一瞬で不機嫌を吹き飛ばし、雪ノ下に強く強く抱きつく。

迷惑がるようにそっぽを向きながらも、その手はばっちり由比ヶ浜の背に回っていた。

きつとこの二人はこの先も、お互いの意志でもってずっと一緒にいるんだろう、と。

その抱き合う姿を見てみると、自然にそう思えた。

「……………『ずっと一緒にいて欲しい。ずっと一緒にいて欲しい。ずっと一緒にいて欲しい』。……雪ノ下?」

絵画じみた光景を壊さぬように邪魔せぬように、そつと三回繰り返す。……こつそつと、自分の胸の内も仮託して。

雪ノ下に判定を求める視線を投げると、なぜだか抱き合う由比ヶ浜とともに呆然とした表情を向けてきていた。

「……………え、なに。どしたの」

それに気圧されつつも呼びかけると、雪ノ下はハツとして再起動する。

「あ……いえ。比企谷くん、クリア……」

「……ね、ヒツキー。今のって……」

「な、なんだよ」

「……ううん。やっぱりなんでもない」

由比ヶ浜はゆるゆると首を振って、何事かを得心する。……もう、なんなんだよ。

「……お題だろ。ただの」

「そうだね。お題だ」

その同意がどうにも幸せそうで、見透かされてる気分になってふいつと目線を逃してしまった。

由比ヶ浜は追撃まではしてこず、至近から雪ノ下に向き直る。

「じゃ、あたしも言うね。『ずっと一緒にいて欲しい。ずっと一緒にいて欲しい。ずっと一緒にいて欲しい』。ずっと、一緒にいようね」

最後の不意打ちで、雪ノ下の白い頬が赤くなる。俺の方に向けていた視線を引き戻され、真正面から由比ヶ浜と見つめ合っていた。

「……由比ヶ浜さん、クリアね。それと……」

由比ヶ浜を抱く腕に力がこもったのがここからでも見て取れた。雪ノ下は浅く息を

吸って。

「……これか、らも、よろしく……」

「うんっ！」

つつかえながらも言い切った雪ノ下のその吐露に、由比ヶ浜は満面の笑みと抱擁でもって答えた。

6. 「ぼ、妨害するの」

温和な時間に紅茶を楽しんでいると、由比ヶ浜が雪ノ下に額を擦り付けながら俺を窺っているのに気がついた。

俺が気づいたことに由比ヶ浜も気づいたらしく、当てていた肩口に顔をうずめてしま
う。

「えつと……じゃ、じゃあ……ゆ、『結衣』」

少しでもくぐもって聞こえる声。髪の間から覗く耳は赤く、そのせいで彼女の緊張が伝わってきてしまう。

雪ノ下は慈しむように由比ヶ浜の髪を撫で付け、その優しさが抜けない目で俺に回答を促してきた。

肺の中身を出し切らんばかりに長く息を吐いて一気に吸い、ハッ、と強く吐く。そして俺はいざ回答せんと口を開いた。

『ゆいゆいゆい』

由比ヶ浜がそれを聞いて鳩が豆鉄砲食らったような顔をパツと上げる。雪ノ下の目からは優しさが引かれ、代わりに軽蔑が足されていた。

「あ、あれ？ ヒ、ヒッキーもうちよつとゆつくり……」

「早口言葉だぞ何言つてんだ」

「うー……なんか思つてたのと違う……」

由比ヶ浜がしよぼくれる。

……いやだつて、さつきこつそり仮託した心の裡ですら丸裸にされてんのに、この状況で童貞クソぼちに想い込めて名前囁けとか無茶振りにも程つてもんがあるでしよう？

ただでさえいやなんでもない忘れる。というかガハマさんあなた、さつきからお題がもう勝敗度外視になつてませんか？

「で、判定は？」

「……くりあー」

ほつぺ膨らませて不承不承の合格を出してくれた。

雪ノ下は呆れを隠しもしない溜息を吐いて、しがみつく由比ヶ浜の肩にそつと触れる。

「……私も、いいかしら。『結衣』」

——その表情に、見惚れた。

『『結衣』』

いつもの勝ち気さは鳴りを潜め、ただでさえ美しい容貌に湛えられた柔らかな優しさが目を奪う。

『結衣』

「——っ！ ゆきのん大好きっ！」

「あ……もう」

目を閉じてお題をクリアした雪ノ下を、感極まった由比ヶ浜が強く強く抱きしめた。

その様があまりに美しく、子供じみた理由で反抗してしまったさつきを後悔してしまふ。

それでも今更という気恥ずかしさには耐えかねて、口の中で溶けるように彼女たちの名前を呟いてみるに留まってしまった。

× × ×

さて、そんなこんなで俺の番。もう少し発想を捻ってみることにした。

「あー、みよ、も、よ、も……」

自分でも一発で言えるかどうか怪しかったので練習していたら、二人に憐れむような目線を貰ってしまう。

「……どしたのヒツキー」

「あなた、ついに壊れてしまったの？ 壊れた比企谷くんみたいよ？」

「ちよつと比企谷くんを一般名詞扱いするのやめてくんない？ 固有名詞だから。ちやんと個があるから」

「え、でもほんとどしたのいきなり」

「……試してたんだよ難しいから。いくぞ、『もよもと』……よし、言えたか？」

中々それっぽく言えた気がする。のだが、どうにも二人ともぼかんとしている。

「えつと……なにそれ？」

「ゆうしやだ。たたかうぞ」

なんなら破壊神まで破壊する。

しかしせっかく答えたのにガハマさんは1、2のポカン継続中。おしやべりの使い方忘れたかな？

『もよもと』？ 比企谷くん、もう一度言ってちょうだい」

「……だから『もよもと』……違うな、『もよもと』……だ」

「……あなた、自分が満足に言えるかどうかも怪しいようなものをお題にしたの？」

「自分が満足に言えるかどうかも怪しいようなものだからお題にしたんだよ」

簡単にクリアされたら悔しいじゃないですか。もと勝てないじゃないですか。

「つていうかあたし何が違うのかわかんないんだけど……『もよもと』だよね？」

「いや、『もよ』……んっ、『もよもと』……『もよもと』、だ」

「ヒツキーも言えてないんじゃない？」

「比企谷くん、それを三回言ってみなさい」

「おまつ……！ 『もよもともよも……もよ……もよもと、もよもと、もよ……もよ……』
くそっ、『もよもと』！」

いやもうなんかゲシユタルトが崩壊しそう。認識まで破壊するとは、げに恐ろしきは
ゆうしやである。

「ね、ゆきのん。ヒツキーがどこで苦しんでるのかわかんない……。『もよもと』じゃな
いの？」

「察するに、『よ』が拗音なのよね？」

「ああ、そうだ」

「よーおん？」

「しよ、のような小さい音を指すのよ。……中学国語の範疇なのだけれど」

「え……そんなの習ったっけ……」

いや習ったけどな。でも材木座とかも知らなそうって偏見がある。小学校から日本
語学び直せとばかりに雪ノ下がフルボッコにしてたし。

「でも……こういう場合、ルール上の裁定はどうなるのかしら？」

と、雪ノ下が顎に人差し指を当て、何事かを考える。

顎をしゃくって続きを促すと、無礼には眇で答えられつつも言葉の続きが流れてくる。

「由比ヶ浜さんと比企谷くんの認識が違えば、当然ながら回答と採点にズレが生じるわよね。先程の『新出シヤンソン歌手シヨ―出演新春シヤンシヨンシヨ―』では私と比企谷くんの合意が由比ヶ浜さんの採点を覆したけれど、私と由比ヶ浜さんの認識が『もよもと』だった以上、採点はそちらでするべきなのかしら？」

こいつ終わったお題まで覚えてんのかよ。しかもミスまで含めて。雪ノ下の末っ子は化け物か。閑話休題。

「む……。確かに俺は『もよ……もよもと』と言ったつもりだったが録音してたわけだし、互いの記憶にしか証拠はないのか……」

突き詰めれば言った言わないの水掛け論になる以上、雪ノ下の言い分のほうが道理は通っているか。つーかよく考えたら発音の正確さを求めるんなら巻紙の時点で俺アウトだったんだよね……。

もよもよ言ってる由比ヶ浜に視線を移す。もよもと見事に言えてねえ。

「由比ヶ浜」

『もよ』……むー、なに?」

『もよもと』でいいわ。悪いな」

「え、だから『もよ……もよ……もよ……? もよもと?』なんだよね?」

「いや言えてねえけど『もよもと』で……ああもうほんとに区別ついてねえんだな。お前が最初に聞いたとおりの『もよもと』でいいんだよ」

「えつと、『もよもと』でいいってこと?」

「ああうんそれでいい」

いや俺もお前のそれ判別付けられないけど。むしろ判別付けられないからどつちで言ってるつもりでもクリアできるけど。

「じゃあ超かんたんなんだけど……『もよもともよもともよもと』。これでいいんだよね?」

「ああ、由比ヶ浜クリアだ」

「なんか、なんだったんだろ……」

「ほんとなんだったんだらうな……」

パスワードのお題からこつち、やることなすこと裏目引いてる感が凄まじい。大きなため息が漏れ出す。

「空回り谷くんの空回りに振り回された格好ね。『もよもともよもともよもと』」

「雪ノ下、クリア」

渾名のセンスの方は直截すぎてアウトだけど。重複と併せてダブルプレー。俺の空回りでスリーアウトチェンジだ。

湯呑みを引き寄せて紅茶を飲む。

もう一つ大きなため息が出てきて、二人の苦笑を買ってしまった。

× × ×

さて、次は雪ノ下なのだが、どうも何かを企んでいる気配がその僅かに細められた目から伝わってくる。由比ヶ浜もそれを感じているのか、しきりにお団子を弄って落ち着かない。

停滞した空気の中、雪ノ下が、口を開いて。

「……私の番ね。『比企谷結衣、由比ヶ浜八幡』」

とんでもない爆弾をダンクシュートで決めてきた。

「つはあ!?! おま、お前……!」

我知らず椅子を蹴立てて立ち上がっていたが、肝心の続く言葉が見つからない。

「ゆきのんっ!?!」

「由比ヶ浜さん、比企谷くんを追い詰めるときには全ての逃げ場をちゃんと塞がないとダメなのよ?」

ひたすら怖えよ由比ヶ浜に何教えてんだよお前。しかも狩りの対象が俺限定だし。

「お前、これは……」

「あら、何も難しいことなどないでしょう? ただのお題なのだから。それとも素直に

敗北を認める?」

くっそ、もうお手つき即敗退じゃねえか。負けられない罰ゲームがここにあるのに。

由比ヶ浜はどうかかと思えば、顔真つ赤にして雪ノ下の右腕を抱きしめながら上目遣いにこつちを見ていて、どうにも伝わってくる喜色が面映ゆくてむず痒くて駄目だ見ると感染する。

「じゃ、じゃああたしから、やる、ね?」

「……お、おう」

何故か出題者ではなく俺の方に確認を取ってくる。腕一本抱かれながらも高みの見物決め込んでる雪ノ下が恨めしい。

「すう……はあ……『比企谷結衣、由比ヶ浜八幡』」

深呼吸して、そつと由比ヶ浜は言の葉を紡ぐ。

『比企谷結衣。由比ヶ浜八幡』

大切なものを愛おしむように、そつと。

『比企谷、結衣。由比ヶ浜、八幡』

胸に緩く結んだ手を当てる、潤んだ目で正面から俺の目を見つめてくる。雪ノ下の腕はいつの間にか離れていた。

顔が熱い。身体が熱い。全身から汗が噴き出る感覚。由比ヶ浜の瞳に吸い込まれそうになる。喉が渇く。言葉が出ない。だというのに、彼女を見ていると見つからないはずの言葉が腹の底でうねり狂い、口を衝こうともがきだす。

「比企谷さん、クリアね」

そんな様だったので、雪ノ下の発言を聞き流していた。由比ヶ浜がびくんと思いつきり反応したことで初めて耳に残った発言に意識が向き、意味を理解して、色付いた金縛りが弾かれるように解けた。

「……ああ、間違えてしまったわね。由比ヶ浜さん、クリア」

いけしやあしやあとしたり顔でのたまう雪ノ下。あ、由比ヶ浜がしゃがみ込んだ。戯画化したら頭の上から煙噴いてそう。そんな一歩引いた視点で見てるふりしないと自分の内心の惨状から目を背けてられないどうも俺です。

間抜けに口をばくばくさせて何か言おうとするも、猫のように目を細めた雪ノ下と丸くなってあうあう言ってる由比ヶ浜を見ると言葉の代わりに熱が迫り上がってくる

ばかり。どうしたって勝てる気がしないのはどうすればいいんですかね？ どうしようもない？ だよね知ってた。

ひとしきり醜態を晒す俺に満足したのか、雪ノ下は視線を外してうずくまった由比ヶ浜の肩に手をかけ、横顔に唇を近づけ……おい、おま、えっ？

一瞬慌てそうになるが、耳元で止まった。だだ大丈夫、あわててないしちようよゆうだからかんぜんにせーふ。ただの致命傷で済んでる。雪ノ下は何事か囁いたのか、由比ヶ浜がまるくなるからかたくなるでさらに防御力を上げていた。

「え、それ……」

由比ヶ浜は錆び付いたギアを動かしながら問い返す由比ヶ浜に、すっげえいい笑顔の雪ノ下がまた一言二言何か囁く。

そのままブリキ人形はどんな顔晒してるのかもわからない俺を見て、赤い顔を更に赤くしていた。

「では次は由比ヶ浜くん。あら、間違えたわ。比企谷くんの番よ」

雪ノ下に弄ばれたままでいれば俺の順番が飛ぶわけでもない。薄笑いを浮かべる雪ノ下を全く意識せず席に着き挑発を全く意に介さず深呼吸をしてお題をただの文字列と認識し何でガハマさんが椅子持ってこつちに来てるんですかね？

「ゆ、いが、はまっ？」

「ぼ、妨害するの」

言いながら、俺のすぐ左に椅子を置いて寄り添ってくる。雪ノ下に視線を飛ばす。そっぽ向きながら笑い堪えてやがった。しばしの間発作をやり過ごし、いつぱいいつぱいな俺の視線を受け止める。

「あなたも、したでしよう？ 妨害行為。問題ないわよね？」

返す返すも自業自得だった。殴りかかった自分の力を十倍返し、これが合気か……！ 女の子がこつちを気にしながら隣に座ってるってこんなにも平静を削るものなんですか？ いや、嫌悪で気にされることなら茶飯事だったけどそう言うのって大概すぐ離れようとするし、そもそもそういうのとこれって全然違うっつーか……。映画館で折本が隣座ってたときとかマジで何も思わなかったし……。

冬の空気を介在して伝わってくる暖かな体温とか、脳髓の奥まで浸食してくる柑橘の香りとか、耳朶に残る柔らかな息づかいとか、身じろぎすれば時折触れる肩の近さとか、頭の中が由比ヶ浜に染められていく。少しでも気を紛らわそうとお題を思い出せば致命傷だった。

だがいつまでもこうしてはいられない。なぜならこの状態で時間をおいても動悸が酷くなる一方で何一つ好転しないからだ。

何事にも決して動じない覚悟を持って、深呼吸を一つ。

『比企谷結衣』

「な、なあに?」

「っ!?!」

隣から予想だにしない一撃がぶつ込まれて危うく奇声が出かけるも、同時にむせることで結果的にお手つき回避するという奇跡。代償に呼吸不全起こしかけてるけど、我慢すればセーフ。

しばらく低酸素状態に苦しみながらも声に出さず咳き込まず耐えきり、目を向けないようにしてた隣を見れば薔薇色の頬をこれでもかと紅に染めてお団子を忙しなく弄くり回してる由比ヶ浜。

お前そんななつてまで刺しに來なくてもいいだろつて突つ込みそうになるけど、やると折角耐えたお題がお手つきなつてしまうので辛うじて自重。

何事にも決して動じない覚悟? 奴は死んだよ。産声を上げる間もなくな。

「……『由比ヶ浜八幡、比企谷、結衣』」

左に細心の注意を払いつつお題の続きを回答する。いつでも緊急停止する心の準備は万全だ。

『『由比ヶ浜八幡、比企谷結衣、由比ヶ浜八幡』……雪ノ下』

「由比ヶ浜くん、クリア。惜しかったわね」

「そこは危なかったわねじゃねえのかよ」

「あら、間違えたわ。比企谷くん、クリア。惜しかったわね」

めっちゃ楽しそうなのが腹立たしい。なるべく顔を動かさないよう目線だけで左を見れば、むにやむにやと嬉しそうにはにかむ由比ヶ浜がお題終わってなお俺の心中をかき乱してくるのだった。

× × ×

目が合ったらえへへと照れ笑いを浮かべてきたり、控えめに袖をつまんできたり、何事か考えてるのか上の空になったと思っただけにやつと表情を緩ませたり、ついでに雪ノ下からの生暖かい視線に晒されたり、そんな猛攻に耐え抜いて由比ヶ浜の手番となった。

正氣に戻った由比ヶ浜は何故か雪ノ下の隣に戻らないまま、手を上げて元氣よく立ち上がり答えた。小学生か。その衝撃で揺れた胸部？ 大人より凄いいんじやないですかね。

「次あたしっ！ 『比企谷雪乃、雪ノ下八幡』！」

雪ノ下が生温い笑顔浮かべたまま硬直した。そらガハマさん相手にあんなことした

らこうもなろう。由比ヶ浜満面の笑顔だし。完全に善意でやってらっしやるつもりだよねこれ？

だがこれでダメージ入るのは雪ノ下ばかりではない。同じこと由比ヶ浜とやったからって慣れてるわけねえだろ無茶言うな。

しかし雪ノ下が慮外の一撃で硬直している今が好機でもある。雪ノ下にまで妨害されたら心臓持たねえ。

由比ヶ浜の袖を指の先でほんの少しつまみ、制服と注意を軽く引く。

「あー……その、俺から、言うわ」

「うんっ」

横目に見る由比ヶ浜は嬉しそうに頷き、盗み見た雪ノ下は頬を染めてまじまじと見返してきていた。思いつきり目が合ったぞ畜生。

「……は、あ。『比企谷雪乃』」

彼女の名前を呼んだとき、正面で目を閉じ身を固くする雪ノ下が視界に入る。あえて物思わぬようにして続きを。

『雪ノ下八幡、比企谷雪乃、雪ノ下八幡』

雪ノ下が身を縮め、熱の籠もった吐息を絞り出す。耳に届く息づかいが俺の中の何かをこそぎ落とす。

『比企谷雪乃、雪ノ下八幡』

どうにか最後まで言い切り、満足げな由比ヶ浜に疲れ切った視線で判定を乞う。

「うん、ヒッキークリアだよ」

その言葉に安堵と解放の長大息。疲れた。なんかめっちゃ疲れた。

重い頭に力を込めて仰ぐと、由比ヶ浜が雪ノ下を見ながら何か考えている。

そしてパツとこつちを見ると、にっこりと。

「ヒッキー、ゆきのん妨害しよう」

「は？」

俺と雪ノ下の声が綺麗に重なる。由比ヶ浜は隣にあつた椅子を持っててっぺこ定位に戻り、こちらに向かって差し招き。ひくつと頬が引きつる。

あれを、やれと。雪ノ下に、あれを。

由比ヶ浜に腕を取られてる雪ノ下は真っ赤になって固まっている。いや無理ですの意味を込めてふるつと首を振るが、ガハマさんはじーつと見つめてくる。なお対ゆきのん特攻スキルであるわけだが、別に俺に特攻じゃないとは言っていない。

しばらく注視を捧げられ続けて、またちよいちよいつと手招きをもらう。意識的なのか知らんけど小首を傾げながらとかもうね？　ほんとね？

ため息とともに両手を挙げて、ガハマさんが破顔一笑。背を向け椅子に手をかけたと

ところで、後ろから透き通るような声。

「……『比企谷、雪乃、雪ノ下八幡』」

振り向くと、真つ赤な雪ノ下が目を閉じて回答を開始していた。なるほど戦術的不利を得る前に片付けるのはいい判断だ。この物言い材木座つぼくてなんか嫌だな。そしてガハマさんは少々不満げなご様子。

『『比企谷……雪乃、雪ノ下八幡、比企谷……雪乃』』

だったのだが、何か思いついたようにいたずらじみた笑みを浮かべ、雪ノ下の腕を引き、頬に唇を……違うから。耳元だから。さつきも同じこと考えたからいつさいどうようしてないからまじよゆう。

近づけて、ぼそつと囁く。

『『雪ノ下八幡』』

「ゆきのんは、どっちがいい?」

「んんんんっ!?!」

ぎりぎりお題の回答を終えてからの妨害工作だったため、その場で椅子をがたつかせ転びそうになってもセーフである。由比ヶ浜が腕取ってたから安心安全。ところで当方全身の汗腺が開いた感覚があるんですがこれどうすればいいんですかね。じつとりと渗む。

「あ、ちよつと遅かったや。ゆきのんクリアだ」

「由比ヶ浜さん……」

「で、ゆきのんはどつちがいい?」

「……何の話かしら」

そつぽ向く雪ノ下にふふーと微笑む由比ヶ浜が最強すぎる。

二人に悟られないように静かに深呼吸をして、暴れ回る鼓動を少しでも鎮める。……勝ち目も見えないし、もういつそ早々と負けた方がいいんじゃないかという考えが頭をよぎったが、ゲームの始めの経緯を考えるに、ここで手を抜いたら下手すると賞罰追加とか再戦とかの可能性が目に見えたので却下した。

全くもつて八方塞がりである。

× × ×

とまれこうまれ俺の番。今回のお題はもう決まっている。猿真似なれど合気の技を受けるがよい。……俺もこれ微妙にテンションおかしくなつてねえか?

「……なら、俺は『由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣』だ」

きよんとした二人の顔。あ、あれー? まさかの効果なし?

「では私から。『由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣、由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣、由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣』。どうかしら」

「あ、ああ。雪ノ下、クリア」

「じゃあ次はあたしね。『由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣。由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣。由比ヶ浜雪乃、雪ノ下結衣』」

「由比ヶ浜、クリア」

何故だ……一瞬で終わつたぞ……二人が出したお題の時と何が違うというのだ……。

世の理不尽に嘆いていると、雪ノ下が少し遠い目をして、嘆息一つ。

「……由比ヶ浜さんと結婚したら、きつと幸せな家庭を築けるのでしょうね」

……雪ノ下が何を、あるいは誰を思い浮かべているのかは想像に難くない。俺ですらそうなのだから、コミュお化けの由比ヶ浜にそれがわからぬはずもなく。

雪ノ下を横合いからぎゅつと抱きしめ、笑いながら睦言を囁く。

「ゆきのん、あたしと結婚する？ あたし、ゆきのんと結婚したら、絶対に幸せになれると思うよ？」

それを聞いた雪ノ下は一瞬目を丸くして、気が抜けたようにふつと息を吐く。

「……それも、いいわね。私が由比ヶ浜さんを幸せにしてあげるわ」

「うん、幸せになろうね」

にっつと笑い合う二人。ほんと見てるだけでほっこりするな。お二方が幸せそうでしょう。

「で、どっちにするんだ？」

「由比ヶ浜ね」

「わ、即答だ」

「雪ノ下の家に由比ヶ浜さんを束縛させるわけにはいかないもの。……あの人たちと別の姓を使えるようになるし」

「でも、あたし雪ノ下って苗字もキレイで好きだよ。ゆきのんにぴったりって感じ」

「あ、ありがとう……」

雪ノ下の雪、誰も触れられない美しき幻想。

でも今はもう隣に座って融かして寄り添ってくれる人がいる。雪ノ下にとって、きつとそれは人生を丸ごと変えてしまうほどの出来事だったことだろう。

花開く雪ノ下を間近で見られる幸福を甘受しながら、俺はまた紅茶に手を伸ばした。

7. 「……………それ、では。お題、は、『二人は、私のこと、を……………どう思っていますか?』」

さて俺の手番が一瞬で終わったのでまた雪ノ下なのだが、見てるとなにやら挙動不審。

俺と由比ヶ浜を交互に見ながら浅い呼吸をして、なのに目が合うと逸らすし、その手も隣でひつついてる由比ヶ浜とティーカップとを行きつ戻りつ忙しい。

最終的に胸に手を当て、雪ノ下は目を閉じたまま口を開いた。

「……………それ、では。お題、は、『二人は、私のこと、を……………どう思っていますか?』」
「……………っ!」

ガハマさんが感動と喜悦で声も出なくなってるぞ。いや分かるが。こう、ずっととなつかなかつた野生動物を飼慣らしごめんなさいごめんなさい睨まないで。何? 何で分かるの? さとりなの?

「ゆきのん、大好き!」

いやそれ解答になってねえから。お題ガン無視じゃねえか。

「俺から行くぞ。『二人は私のことをどう思っていますか二人は私のことをどう思っていますか?』」

「いますか二人は私のことをどう思っていますか』。どうだ？」
「……比企谷くん、クリア」

由比ヶ浜に力一杯抱きしめられてる雪ノ下が少し苦しそうにクリア宣告。ガハマさん、もうちよつと手心つてもんをだな。いや雪ノ下も満更じやなさそうだしいいが。

「ゆきのん、あたしも」。『二人は私のことをどう思っていますか二人は私のことをどう思っていますか二人は私のことをどう思っていますか』

「……由比ヶ浜さん、クリア」

雪ノ下はふいつとそっぽを向いて、再度口を開いた。

「お題、少し簡単すぎたかしらね？」

それを聞いた由比ヶ浜がほった擦り付けてもうほんと犬だなあれ。尻尾が幻視で
きるレベル。つーか雪ノ下もまだお題言い張んのな。ちよつと迷走しすぎてないかこ
のゲーム。ねえ？

× × ×

「んっふふー、次はあたしのお題だねー」

目を輝かせた由比ヶ浜が満面の笑みで雪ノ下をロックオンしてる。好きすぎんだろ

やっぱり。まあそらね? わんこにあんな餌与えたらむべなるかな。

「うん、やつぱこれかな。『世界で一番の親友』!」

「……………もう」

抱きついて嬉しそうに宣言する由比ヶ浜に雪ノ下がそつぽ向きつつも軽く抱きしめ返してて超眼福。

百合つていい文化だよな。

「……………それじゃあ、私から言うわね。『世界で一番の親友。世界で一番の親友。世界で一番の親友』」

「ゆきのん大好きっ!」

いやそこはクリアかどうかじゃないのかよ。判定不要でクリアなの? クリアでいいんでしようね見れば分かります。

「俺も行くぞー。『世界で一番の親友世界で一番の親友世界で一番の親友』。どうだ?」

あ、駄目だこれ。完全に二人の世界入ってるわ聞こえてねえ。もしもーし?

何だろこれ。今なら俺帰っても気付かれないんじゃないかな? でもそんな度胸ないからお紅茶飲んで睦み合う二人を眺めあそばしますわ。ああやつぱうめえなあ雪ノ下印の紅茶。うめえ。

から何もまちがってねえ。由比ヶ浜の呆れたような目も雪ノ下の凍てつくような目も痛くない。痛くないからやめてお願い。

「勇気を振り絞った女の子に対する仕打ちがこれだなんて、あなた自分の良心に問うて感ずるところはないの?」

「……………ただのお題だろ」

「ヒッキー……………」

「……………ずず」

ああ紅茶うめえなあ。うまいはずなんだけど味がしない不思議。

「……………で、解答は?」

由比ヶ浜が飲み込んだ大量の言葉と雪ノ下の恨めしげな言外の抗議に耐えかねて、話を進めようとする。

「はあ……………しようがないなあヒッキーは」

「……………いくじなし」

ぼつりと雪ノ下がこぼした言葉が聞こえないような都合のいい耳とかどつかで売ってたりしませんかね。どろり濃厚脂汗。

「んつと、ヒッキー何回『す』って言ったの?」

「えつと……………あれ、俺何回言った?」

「あら、あなたの名前は悪口なの？」

「その前二つ」

雪ノ下はわざとらしくそつぽを向く。横顔にただいま不機嫌中って書かれてるわ。

「ほらー、ゆきのん機嫌直そうよー」

「ちよ……由比ヶ浜さん、やめなさい……」

振り払おうとする手には力はないね。やっぱりガハマさんがナンバーワン！ 力関係的な意味でね？

「じゃ、あたしから言うね。『ヘタレ、ポケナス、八幡、ヘタレ、ポケナス、八幡、ヘタレ、ポケナス、八幡』……。あはは、なんかヒツキーの悪口言ってるみたいで落ち着かないや」

聞きました雪ノ下さん？ 少しは見習った方がいいんじゃないかしら？ でも由比ヶ浜さん、八幡は悪口じゃないのでそこ注意ね。

「……由比ヶ浜さん、クリア」

そしてちろつと流し目を送られる。へいへいつと。

『ヘタレ、ポケナス、八幡、ヘタレ、ポケナス、八幡、ヘタレ、ポケナス、八幡』。自分でこれ言うのもいい気はしねえな」

「……比企谷くん、クリア」

「おう」

しかしこれで少しは溜飲が降りたのか、それともガハマさんセラピー効果か……断然後者だなこれ。雪ノ下のご機嫌も幾分かマシにはなったようだ。

× × ×

「じゃ、あたしだね」

「おう」

「ええ」

由比ヶ浜はそう言うと、雪ノ下をじっと見詰める。

ん……。なんか、雰囲気が……。

「ゆ、由比ヶ浜さん?」

「……………」

由比ヶ浜は何も言わずに、戸惑う雪ノ下と見つめ合う。

その表情には、苦笑と、慈愛と、柔和さと……俺ごときには完全な理解なんて到底望めそうにない複雑さが見て取れた。

暫くすると由比ヶ浜は雪ノ下から俺に視線を移す。

心臓がどくりと跳ねる。その目には、穏やかな熱が感じられた。

「じゃ……いくね」

静かに宣言して、軽く息を吸って、

『理由を付けないと動けないのに頼まれると誰でも助けちゃって、自分が痛いのは分からないのに他人が痛いのはちゃんと気付いて、捻くれてるけど優しくして、優しくして……いつもあたし達を助けてくれて……』

並べ立てるは、誰かに向けたメッセージ。ちつぽけなプライドにしがみついたところのひねくれっぽちに、こうやるんだよと手取り足取り優しく教える心の開き方。

「由比ヶ浜……さん……」

「あれ？ 五十文字超えちゃったかな」

「……ええ、そう、ね」

「じゃあ、お手つき一回だね」

「……………」

言葉もない。雪ノ下も、呆然と由比ヶ浜を見ている。

「少し、短くしようかな」

俺たちの視線を受けた由比ヶ浜はふにやりと微笑んで。

『「かつこ悪いけどかつこいい、あたしの、ヒーロー」』

包むように優しく、そう言った。

「っ……………」

やめてくれ。俺はそんなんじゃない。そんなマシンなんじゃない。そう声高に主張する俺の中の化け物は、彼女の視線に射止められて黙り込む。

頬を紅に染めてはにかむ由比ヶ浜がどこまでも愛おしく思えて、俺は何も言えなくなる。

「……」

「ここまで想われていたのか。俺は。俺なんかが。世界一素敵な女の子に。」

「……………お題だよ? ただの」

これを言葉通り取れるほど、俺は厚顔にはなれそうもない。

一步を踏み出すのは、いつだって由比ヶ浜からなんだ。

「……………私から、答えましょうか」

「うん。どうぞ」

「……………『格好悪いけど格好いい、あたしの、ヒーロー。格好悪いけど格好いい、あたしの、ヒーロー』。格好悪いけど格好いい、あたしの、ヒーロー」

雪ノ下は嘸み締めるように、ゆっくりと繰り返す。既に早口言葉の体すら為していない。

由比ヶ浜は笑顔のまま、雪ノ下に

「ゆきのん、クリア」

そう、告げる。

「そう……ね」

雪ノ下は何を思っているのか、自らの唇に指を当て、頬に紅射しながら視線を中空に置いてみる。

由比ヶ浜は視線をこちらに向け、窺うように促してくる。

「……次、ヒツキーだよ？」

「……ああ」

……なけなしの覚悟は決まった。答えることも。応えることも。

「行くぞ……『かつこ悪いけどかつこいい、あたしのヒーロー、かつこ悪いけどかつこいい、あたしのヒーロー』。はあ……どうだ？」

この期に及んで『本気か』、と聞きそうになる口を抑えて、正誤を問う。

「うん、ヒツキークリア！」

その嬉しそうな笑顔に、息が詰まりそうになる。

これが由比ヶ浜の『問いかけ』ならば、俺もちゃんと、応えなくちゃならない。

いや、違う。応えるんだ。

義務ではなく。俺の、意思で。

× × ×

次は俺の番だ。……俺の、番だ。

腹をくくれ。ちゃんと、伝えろ。

この、誰より大事な二人に。

気付けば、部屋は茜色に染まっていた。視線を上げると、二人の背にする窓から沈みゆく夕日が見えた。

……もうそんな時間なのか。ちよつとしたゲームだったのが、随分大袈裟になって長引いたもんだ。

「……ちよつといいか」

「?」

「……何かしら」

「場所を移りたい」

言つて、席を立つ。椅子を持って、長机の真正面。黒板を背にして座る。

紅茶の香りがしなくなった、夕日の差し込む部室。二人に伝えるなら、あの時の構図がいいと、なんとなく思った。

俺の様子から察してくれたのだろうか。二人も場所を移し、長机を横に挟んで俺の正面に並んでくれた。いつもの距離よりずっと近くに二人がいる。

深呼吸を一つ。

由比ヶ浜は羞恥と緊張に潰されそうになる俺を、一片の期待の色が混じった穏やかな笑顔で見守っている。

雪ノ下は不安と昂揚を緬い交ぜにした視線を寄越し、縋るように由比ヶ浜の手を握っている。

目を閉じる。思い出す。

思い出す。この一年を。

……口を、開く。

『暇を潰しあつた赤いバラ』

雪ノ下を想う。

このそれなりに長く、しかし本当にあつという間の一年。

お互いにすれ違い、傷つけ合い、しかし大切な何かを残した、まちがっている青春の日々。

『飼い慣らしあつた野のキツネ』

由比ヶ浜を想う。

ああ、あの物語の言うとおりだ。

一緒にいたから。一緒に居続けたからこそ、俺たちは世界でたった一つの、かけがえないものになれたんだろう。

大切な者は目に見えない。だからこそ。

『……心で見ろべき人たち』

……俺の求めた本物、と続けるには恐らく文字数が足りないってことにしよう。これ以上は勘弁してほしい。固めた覚悟もこの辺が限界だ。

顔が熱い。顔だけじゃねーわ全身あついわ今何月だよ。暖房なかったはずだよこの部屋? つつーか閉じた目を開くのが怖いんですけど。

限界まで高まった内圧を、熱せられた体温と共に大きく吐き出す。再度息を吸いながら勢い付けて目を開けると、二人は。

呆然と、はらはらと、声もなく落涙していた。

握りあつていた手だけを繋いだまま、驚いたような、惚けたような表情で固まり、俺を見て、どんな宝石より美しい涙を流し続けていた。

「……………ッ!」

俺の身体は止まっていた呼吸を思い出し、同時に身体が跳ねて椅子から転げ落ちそうになる。寝てもいねえのにジャーキングかよ。

二人を目の当たりにして数秒、本当に何も考えられなかった。

……魅入られていた。言葉も出ないほど。魂の底から惹かれるほど。

神話に出てくる石化する瞳というのは、こうしたものだっただろうか。

「あつ……」

「あ……」

俺の道化のような醜態に、二人も意識を取り戻す。反射的に二人の手が俺に伸びるが、それを手で制し、座り直す。

「……？ ゆ、ゆきのん!? ど、どしたの急に泣いたりして!？」

「あなたこそ……! え、あ……私も……?」

二人は自分の頬に手を当て、我知らず流していた涙を認識する。

「えつ、あれ、な、なんで……悲しくないのに……すつご……うれし……のに……う……

ああああ……」

「どうして泣くのよ……。私は……あなたまで……く……ふ……うう……」

二人は抱きしめあつて声を殺し、泣き続ける。

何で。何が。

一体何がこうまで雪ノ下の、由比ヶ浜の心を爪弾いたというのか。

まさか。

まさか、本当に俺の言葉で。

俺なんかの、言葉で。

それが信じられなくて、俺はただ呆然としていることしかできなかつた。

二人分の押し殺したすすり泣きの響く部屋。

沈んでいく夕日の中で、頑是無く涙する二人は、この上なく神聖なものに感ぜられた。

8. 「与えずに求めるばかりでは、不実というものよね

……」

「その……ごめんなさい、取り乱してしまつて」

「うん……。なんか自分でもわけわかんなくなつてたかも」

「や……その、いいんだ。気にしないでくれ」

どう返していいか分からなくて、そんな当たり障りのないことしか言えない。いや何
言えつーんだよ。なんで泣いたんですか？ 聞けるか馬鹿野郎
。

夕日は沈んだが、蛍光灯を付けようとは思わなかつた。月明かりと地上の灯りだけが
弱々しく闇を祓う、優しい薄暗がり。

今はまだ墨色のヴェールにお互いの顔を隠してでもいないと、会話を続けられるかも
怪しかつた。

「ええと……。それじゃあ、解答ね」

「うん。……ねえ、ゆきのん」

「ええ。私も……。そう、したい」

僅かな言葉と交わし合う視線、重ねた手と手で繋がりあう二人のシルエツトだけが見える。

二人の間で何かを通じ合ったんだろうが、俺だけ分らないことが少し悔しくもある。この仲良しカップルツーカーもいいところだ。

「大丈夫か？ お題、忘れてたりは……」

「忘れるはずないじゃない。……忘れられるはず、ないじゃない」

「一生忘れないよ」

「……そうかよ」

まああれを繰り返せつてのも正直辛いし助かるが……。そこまで言われるのも、その、なんだ……。ああもう、電気付けなくて正解だ。見せられるかこんな面。

「行くわよ」

「行くね」

声を揃えて解答の宣言をする雪ノ下と由比ヶ浜。ここで俺も遅ればせながら、二人が先程暗黙に通じ合った『したいこと』の中身をようやくのこと察し、また一つ気恥ずかしさに包まれた喜びが累積する。

雪ノ下と由比ヶ浜は並んで、そつと息を吸う。静寂に響く息遣いが俺の鼓膜を揺らした。

「暇を潰しあつた赤いバラ……飼ひ慣らしあつた野のキツネ……心で見るべき人たち」

そつと噛み締めるように、綺麗に重なつた言葉を綴つていく。ただのお題だ、なんて。もうそんな言葉で自分を誤魔化すことも出来そうになかつた。

「暇を潰しあつた赤いバラ、飼ひ慣らしあつた野のキツネ、心で見るべき人たち」

仄暗い夜陰の向こうから、熱の籠もつた視線を感じる。きつと錯覚ではないはずだ。今ならそれを言葉に寄らずに信じられる気がした。

「暇を潰しあつた赤いバラ。飼ひ慣らしあつた野のキツネ。心で見るべき人たち」

三度繰り返す二重奏には一寸の狂いなく、雪ノ下と由比ヶ浜は楚々として言葉を結ぶ。

「比企谷くん」

「ヒツキー」

「……………雪ノ下。由比ヶ浜。……………クリアだ」

二人からは言葉もなく、かすかな吐息や所作の起こす衣擦れで了知を返す。

自分の顔が熱を持つている自覚はある。心底から無限に湧き上がる焔が自らの身を焦がしているのだから当然だ。

発作的に叫び出したくなる衝動を切り刻みながら、荒く息を吐いてその残骸を吐き散

らす。

椅子の端を掴む強ばった手指をじっくり解きほぐしながら、俺は雪ノ下の手番の始まりを待った。

× × ×

「……紅茶」

宵闇のゆりかごの中、雪ノ下がほつりと眩く。

「そういえば、もう飲んでしまっていたかしら。淹れなおしましょうか」

言われて、夕日が出る前にはもう飲みきっていたなと思ひ出す。

シルエットの片方が繋いだ手をそっと解き、音もなく立ち上がる。闇に融ける濡れ場の黒髪が、窓を背にすることで月光に浮かび上がり、学校的一幕であることを忘れてしまう、誰もが息を呑む光景に仕立て上げる。

……改めて雪ノ下の規格外の美しさを目の当たりにした。

そのまま雪ノ下は部屋の入口まで歩いて行き、蛍光灯のスイッチを入れる。そこでようやく夜の帳の魔法が解け、いつの間にか詰めていた息を俺は吐き出した。

雪ノ下はケトルのところまで歩いて行き、紅茶の準備を始める。

俺と由比ヶ浜は目を見合わせ、先程の幻想的なまでに美しい一枚絵の感動を、言葉に依らずに共有していた。視線でいいよね、いい……しているうちに水が沸き立つ音が聞こえ始める。

「……………拗ねるんじゃない、なくて」

それに重ねて、しかし水音に一切紛れることなく、雪ノ下がぼつりと呟く。自然、俺も由比ヶ浜も雪ノ下の後ろ姿を目で追う。

「一方的に求めるよりもまず、自分から伝える努力をすべきだったのよね……。ごめんなさい」

カチャカチャと陶磁の擦れる音が追加される。寂寞の混じる声はしかし穏やかで。

振り返った雪ノ下の口元には吹っ切れたような笑顔、手には茶器。

雪ノ下は静かに由比ヶ浜の元まで歩き、マグカップに紅茶を淹れる。由比ヶ浜は照れとはにかみを浮かべてそれを受けた。

「本当に……。敵わないわ」

彼女は由比ヶ浜を眩しそうに見て、そう、零す。

長机をぐるり回って、俺の隣まで来てくれる。

声に入り交じる穏やかさが表に現れたような微笑。至近で紅茶を淹れてくれる艶やかな立ち姿に、俺は礼を言うのも忘れて見惚れていた。

「与えずに求めるばかりでは、不実というものよね……」

むしろそれは俺の方だ。俺はこの二人にもらったものの十分の一も返せている気がしない。

雪ノ下は自分のティーカップにも紅茶を淹れ、ポットを片付けた後に着席する。その目は俺を真つ直ぐ見ていた。

「……そうね。少しだけ、考えさせてちょうだい」

「うん。待つよ。幾らでも」

由比ヶ浜がいらえを返し、俺は黙って頷いた。

「ありがとう……。私、由比ヶ浜さんには負けたくない……。ううん、少し違うわね」

途中まで言いかけ、首を振ってキャンセル。

「対等で、いたいもの」

凧ぐように笑んで、目を閉じる。そのまましばしの静寂。由比ヶ浜は黙ってじつと雪ノ下を見守っている。こういうとき、由比ヶ浜は不思議なくらい大人びる。同じ高校生徒は思えない程に。

やがて雪ノ下が目を開き、自分から由比ヶ浜の手を取った。由比ヶ浜は一瞬虚を突かれたように驚きを顔に出すが、すぐにそれを年相応の微笑みで塗り替え、両の手で優しく包み込む。

そうして雪ノ下は、真正面から俺の目を見て。

『誰よりも、凄い人』

たった二言。わずか十文字。

それだけの言葉で、俺の頭は天地が引つ繰り返るほどに掻き乱された。

雪ノ下が。

あの雪ノ下が。

俺なんかを、誰よりも、と。

身体全体がバグっているんじゃないかってくらい、焼け付くような熱を持つ。恥ずかしく、しかし喜ばしく。面映ゆく、されど誇らしく。

同じ構図で座っていた、夕暮れのあの日。理解されたいんじゃない、理解したいんだ、なんて考えたあの時を思い出す。浅薄だったと認めざるを得ない。

焦がれるほど理解したいと思う人に認められることが、これほどまでに掻きふるものだったなんて。俺はまるで知らなかった。

「ゆきのん」

「ええ……。あなたの言葉も、届けてあげて」

「ヒッキー……。『誰よりも、すごい人。誰よりも、すごい人。誰よりも……。すごい、ひと』

……。あたしにとっても、だよ。あたしの……。あたしたちの、ヒーロー」

「っ……………」

由比ヶ浜の言葉が、乱れた心に響き渡る。

「由比ヶ浜さん、クリ、あ……………」

「ヒツキー……………」

熱くて熱くて、まるで麻痺したように身体の自由が利かない。視界がぼやける。二人が、俺の顔を見て呆然としているような気がしたが、それももう分からない。大丈夫か俺。このまま死ぬの？

一瞬それでもいいやと思ってしまうくらいに多幸感に塗れているのが自分でも、気付いたら正面の席がもぬけの殻になっていた。

反射的に左右を確認、する間際。ふわり、と優しい感触に挟まれる。

「あ……………」

「ごめん、ヒツキー……………がまん、できなかつた」

「あなたにも……………あつたのね。心の弱さと言うものが」

雪ノ下と由比ヶ浜に、抱きしめられていた。

「嬉しかったの？ ヒツキーがそんなにも喜んでくれたのが、あたしも……………嬉しい」

「あなたの涙を見ていると……………胸がどうしようもなく切なくなつて……………。気付けば、こ
う、していたわ」

涙？ 俺の？

俺、泣いてるのか……？

頬に触れようにも両の腕は二人に抱き取られたまま、温感はずり切れたままの役立たず。

分かるのは、視界が暈けていることばかり。

「ゆっ……ききの、した……」

声を出して、始めて自分がしゃくり上げていることに気付いた。追って、自分が泣いていることをようやく理解した。

「何かしら……？」

「お題を……俺も……」

「……ゆつくりでいいわ。落ち着いて」

はは……。早口言葉、勝負だったろうが。トチらせんならダメだろ、急かさなきや。

「『誰よりも……凄い、人……誰よりも、凄い人。誰よりも、凄い人』」

「ええ……比企谷くん、クリア」

泣き濡れた声が本当にまちがっていなかったかは、自信がない。だが、雪ノ下は認め、由比ヶ浜からも否はなかった。

ああ、と言う口籠もった返事は聞こえただろうか。抱きしめる力は弱まらず、視界は

暈けたまま。それでも、俺の心はどこまでも晴れやかだった。

9. 「……………」 『また、勝てなかつたよ』

じょうきようりせつと。

ゆきのしたさんとゆいがはまさんはむかいのせきにもどりました。はちまんくんはせきについたままです。

二人の顔、見れねえ。

いや暈けるとか滲んでるとかそういうんじゃなくて。見れねえ。無理だから。視界？ くつきりはつきり自分の上履き映してますが何か。

同級生の女子かつ同じ部活の仲間かつこの世の誰より見栄を張りたい世界一可愛い女の子たちにボロ泣きした姿を見られて抱きしめられて泣き止むまで抱きしめられたまま頭よしよして慰められて、どの面下げて顔合わせると？

リセットしたのは状況だけだ。心理は残酷に継続中。

自分の心音が喧しく響く中でも、二人の息遣いや衣擦れの音はしっかりと耳が拾ってくる。

その度にびくんびくんどつくーんとしてると、由比ヶ浜がくすつと笑うのがはつきり聞こえた。

「じゃ、いくね。『みんなにとって、奉仕部は、何?』」

その問いかけに、自然と由比ヶ浜の顔を見ていた。当然、雪ノ下も視界に入る。

二人は俺の醜態を気にした様子もなく、無為な笑顔で佇んでいた。思わず肩の力が抜ける。

俺と目が合つて、由比ヶ浜の笑みが照れるように深まる。

俺にとつての、奉仕部、か。

「由比ヶ浜さん」

「うん」

『みんなにとって、奉仕部は、何? みんなにとって、奉仕部は、何? みんなにとつ

て、奉仕部は、何?』

「うん。クリアだね、ゆきのん」

当たり前前に達成。今更間違えるはずもない。

「俺も、いいか?」

「もちろん」

『みんなにとつて、奉仕部は、何? みんなにとつて、奉仕部は、何? みんなにとつ

て、奉仕部は、何?』

「ヒツキーもクリア。簡単すぎたかな?」

「いや……そうでもねーかもな」

「ええ……そうね」

きつちり言葉にするのは、きつとそんなに簡単じゃない。

いつだって、そうだった。

「もうすぐ……終わるわね」

雪ノ下がぼつりと零す。視線は俺の背後に向いていて、振り向き追えば壁掛け時計。文字盤は完全下校時刻まで幾許もないことを声もなく告げていた。

× × ×

由比ヶ浜の出題が終わり、一周回って俺の番。

湯飲みをとり、傾げる。適温というには些か冷めすぎた紅茶をひとすり。認める他ない、幸福の香り。

でもそれは、この部室そのものなんかではなくて。

俺の目の前で並んで座る、この二人こそが……………。

「何よりもなくしたくない、大切な居場所。お前らもそう思ってくれていることを願う」

「…………！」

「ひき…………がや…………くん」

この二人がいるからこそ、この部室はこんなにも暖かい。

二人の笑顔が、愛おしい。

「…………ねえねえ、ヒツキー！ あたし、聞き逃しちやっとなー！ だからもう一回言っ

！」

「おまつ…………！」

鬼の所行ですか!? あれをもう一度言えと!?

「…………そうね、比企谷くん。私も、確実性を期すためにもう一度聞いておきたいわね」

「お前ら…………」

くそっ！ ルールを逆手に取りやがって…………！ いつの間にこんな小技覚えた由

比ヶ浜！

「……………何よりもなくしたくない、大切な居場所。お前らもそう思ってくれているこ

とを願う』」

「もーいつかい！」

「そうね、もう一回」

「勘弁してください…………」

俯いて顔を覆う。俺にもう二本腕があつたらお手上げしてた。手が足りん。

「ふふ、しょうがないなあ」

「そうね。許してあげましょう」

二人で軽く笑い合つて、しかしすぐに遊んだような態度は引つ込み、真摯な笑顔がかんばせを彩る。

由比ヶ浜と雪ノ下はそつと口を開き、

『何よりもなくしたくない、大切な居場所。あたしはそう思っているよ』

『何よりもなくしたくない、大切な居場所。私はそう思っているわ』

そう、言つた。

× × ×

言葉にならない感情の奔流が体内を駆け巡る。多分今俺口元とかめつちやにやついてるわ。

「……お前らの、負けだな」

嘘だこんなの。勝つた気がしねえ通り越して完つ璧に俺の負け。ルール上は勝つたのかもしれないが、どつからどう見ても譲つてもらつてるし、っつーかマジで本気かこい

つら？ 俺が由比ヶ浜に勝ったら……。

二人の顔、とても見られん。

が、くすつと笑う透き通った声が聞こえて、半ば無意識のうちに雪ノ下を追ってしま
う。

雪ノ下は長い黒髪をかき上げて、いつもの強い瞳で、笑みを含んだ口を開く。

「比企谷くんから始まったのだから、比企谷くんが終わるのは不公平でしょう。私たち
にも後一度、出題の権利があるはずだわ」

なるほど公平性の点から判じれば正しかろう。まあそうでなくともこんな終わり方
で俺の勝ちだぜなんて主張できるわけねえんだが。

「ん、その通りだな。妥当だ」

「どゆこと？ まだ終わりじゃないの？」

ガハマさんだけが首を傾げておられるが、この子マジか……。罰ゲーム上等で負けに
行ったのか。あの罰ゲームで。

「由比ヶ浜さん。今私たちのお手つきが二回、比企谷くんが一回よね。でも、出題回数は
比企谷くんが十回、私たちは九回。一回分、比企谷くんが有利でしょう？ だから私た
ちは、その一回を埋める権利がある。それでしよう？」

「ああ。言われてみりゃ当然だな」

「ふーん。でもそれ、ヒッキーミスったら、勝ち負けどうなっちゃうの?」

由比ヶ浜が疑問を呈してくる。まあ引き分けノーゲームが順当だよな。と、思っていたのだが。

雪ノ下が人差し指を口元に、いかにも考えていますという外連味溢れる動作で口を開く。

「そうね……。引き分けて、勝ったけど負けてもいるのか、勝敗なしなのか。どちらだと思う?」

「?」

「……ご褒美と罰ゲーム、全部やるか、何もしないか。どちらだと思う?」

「! 全部やる!」

「だそうだけど……」

くすつと笑って、こつちに振ってきた。振ってきやがった。

「比企谷くん、どうかしら」

「おま、それを俺に聞くのか……」

「あら、民主主義に則っているだけよ?」

楽しそうに追い詰めてくる雪ノ下。隣にはニコニコ顔の由比ヶ浜。

え? 何これ。罰ゲーム全部ってことは、雪ノ下と由比ヶ浜に一週間お弁当作っても

らって、次のテストまで三人だけの勉強会開いて、休日に由比ヶ浜とデートして、二人の身体を……触るの？ それか罰ゲームなしで何もなしか選べって？ 当人たちの前で？

ああ、そうだ。つまり雪ノ下は、こう問いかけてきているのだ。

『あなたは、どうしたい？』と。

……………こんなの回避できるわけねえだろ。する気になれるわけねえんだから。

「……………俺も、それでいい」

「ヒツキー、どれ？」

由比ヶ浜あ！

「比企谷くん、由比ヶ浜さんが分からないそうよ？ 指示語を使わずに希望を述べてくれないかしら」

「……………引き分けは、勝っていると同時に負けてもいる、んじゃねえの。知らんけど」
百戦錬磨の敗北者。負けることなら俺が最強。…………だから、このゲームでも俺は負けるんだらう。

「だってさ、ゆきのん」

「ええ、満場一致で決定ね」

この二人に、俺はきつと一生負け続ける。

そりやそうだ。負けても全く後悔しないんだから。

「ところで私は比企谷くんを一人勝ちさせる気は更々ないのだけれど、『比企谷くん、どう思う?』」

「……………『また、勝てなかったよ』」

「『ヒツキーも勝ってるよ!』」

「……………ふふ、一人とも、お手つきね」

かっこつけてもこの様だ。

と、完全下校を知らせるチャイムが鳴り響く。今日は時間が飛ぶように過ぎるな。

鐘の余韻が響く部屋にて、残すところ、最後の一問。

由比ヶ浜の顔を見る。彼女は嬉しそうな笑顔で雪ノ下に寄り添い、長机越しに俺に手を伸ばしてきた。

「『ずっと、一緒にいようね』」

「『ええ、きつとね』」

「『……………ああ』」

その手をそつと握り返す。その柔らかさと暖かさが、俺たちを繋いでいてくれる気がした。

10. 「……………劣情の籠もった瞳。身の危険を感じるわ」

「……………引き分け、ね」

喜色を含む雪ノ下のその言葉を引きかけに、俺たちは忙しなく帰りの支度を始める。平塚先生にどやされる前に帰らんと。

程なく終えて、三人揃って昇降口から出ていく。とはいえ……………。

「……………あー、その、な。もう時間も遅いし、暗いし。……………送ってく」

この季節のこの時間だ。小町がいれば女の子を夜道に放り出して送り届けないとかありえないでしょとキレ散らかすのが目に見えているので、他意なく送り届けることにする。自転車は今日は置いていこう。ほんとだよ？ 他意はないよ？

「ヒツキー、優しいね」

「……………ありがとう。嬉しいわ」

「ばっかお前らこれは小町に」

「ふふ、分かっている分かってる」

「そうね、大丈夫よ。ちゃんと理解しているから」

そのしみじみ笑うのをやめてくれ……。

身体が熱くなり、二人の顔が見れなくなつて一歩分先に出る。

背後からは互いに笑み交わすような気配と、軽い呆れの空気。

「ねえゆきのん。ヒツキーのお弁当なだけでさ」

「なにかしら」

「おみくじみたいにさ、勝ちと負けで半分コして、二人で作らない？」

「……そうね。そう、しましようか」

「うんっ！ やったー！ 一週間ゆきのんちにお泊まりだー！ 朝お弁当作るならそうなるよね！ ね、ね、今日も行つていい？ ヒツキーがせっかく送つてくれるんだし、帰り道いっしょの方がヒツキーも楽し！ でき、いっしょに来週の計画しようよ！

デートはあたしさわんないけど、それ以外！」

二人の会話を背に、改めてあのゲームの賞罰が夢幻じやなかったんだなつて実感する。

雪ノ下監修の由比ヶ浜共同手作り弁当。三人だけの勉強会。休日デート。……………

触つていい権利。大丈夫か俺。人生の幸運全部使い果たしてないか。

やばいな多分顔真つ赤だわ。前に出てて良かった。

「ヒツキー、ヒツキーも来週の計画する？」

「いや、この時間に雪ノ下の家に上がり込むのはまずいだろ」

「え、でも来週から勉強会するんだよね？ それならどっちみち……」

その言葉に思わず振り向いてしまう。

「おい待て。……雪ノ下んちでやんの？」

「違うの？」

二人で雪ノ下に視線を向け、お伺いを立てる。雪ノ下はそっぽを向きながら口を開いた。

「……そう、ね。少なくとも今までは、私の家か、由比ヶ浜さんの家でやっていたわ」

「うん、でもうちにヒッキー連れてくるとママが邪魔しに来そうだからね……。ほんとやめてほしい……」

由比ヶ浜が大仰に溜息を吐くが待つんだそうじゃない。

「それにゆきのんが本気でちゃんとやるって言うんなら、時間も遅くなると思うし。ヒッキーも知ってるけど、ゆきのんのご飯すつごく美味しいんだよ」

「……………マジ？」

「当たり前じゃん！ ていうかヒッキーゆきのんの料理食べたことあるでしょ！」

「いや料理の腕は知ってるよそこじゃねえよ」

整理しよう。お昼に手作り弁当、その後は女の子の家に上がって勉強会、夕食でも手

料理を振る舞われる。

なんだこれ。幻術か？

「……………え、いいの？」

「……………それが成績向上に必要ななら、そうなるわね」

そつぽを向いたまま、雪ノ下がそう答える。え、いいの？ いいのか？ いいのか

……………。マジか……………。

「おべんとつくってー、勉強会してー、デートして……………。ね、ヒツキー」

「……………何だ？」

「……………触るの、いつする？」

「……………」

「わ、と。ヒツキー？」

「っ、悪い」

ああうん、フリーズした。急に俺が止まったせいで由比ヶ浜がぶつかりかける。反射的に硬直解けて受け止めてしまったけど。

いやどう答えろっつーんだこれ。この今一瞬だけ触れた女の子の身体を、好きに触る権利。それが二人分。もう一人の方を見れば、顔を赤くして俺たちを凝視している。

この温かな日だまりのような女の子を、この無垢な新雪のような女の子を、俺の好き

なように。

考えただけでくらくらしてくる。

「……………俺と雪ノ下の予定は、考慮に入れる必要、ねえから。由比ヶ浜が、決めてくれ」

「……………そう、ね。それが、いいでしょう」

「……………うん」

由比ヶ浜は俺と雪ノ下の目を覗き込んで、受領する。

一つ、二つ、三つ。立ち止まり、目を閉じ、深く呼吸して、表れたのは弾けるような笑顔。

「じゃ、日曜のデートの後！ あたしとデートした後、ゆきのんちで二人まとめて！」

「待て」

「待って」

口を揃えて俺と雪ノ下が止めに入った。この子正気？

「えー？ でもあたしが決めていいんでしょー？」

「確かに言ったが。いやしかしな」

「学校じゃまずいでしょ？」

「そうね…………。例え部室であつてもリスクしかないけれど…………」

一色が突然やって来るとかノックなしでアラサー襲来とか洒落にならん。

「あたしの家もヒッキーんちも、家族いるし」

「まあ、見られる恐れはあるわな……」

小町やガハママさんに見られたらって考えると後が怖すぎる。

「お外でなんて、あたしやだよ？」

「勿論私も願ひ下げだけれど……」

「論外だ」

この二人のそういう姿を余人に見られる可能性がある時点で死んでも認めん。カラオケボックスとか満喫とかの閉鎖空間？ 監視カメラの存在もそうだし、硝子張りの扉越しに覗かれるとか店員入ってくる可能性を考えれば、学校以上に有り得ない選択肢だ。ホテルや旅館とかの宿泊施設？ 高校生の男一人女二人で外泊とか頭沸いてんのか。

「じゃ、他にたくない？」

「……………そう、ね」

「……………確かに、そう、だが」

並べ立てられれば納得せざるを得ない。由比ヶ浜に論理だった説明で俺と雪ノ下が真正面から論破されるとは……。なんだコレ天変地異？ いや今の俺たちの状況がまさに破天荒だけ。でも待とう？

「あー……、その、何だ……。雪ノ下の家だと外界から隔離された密室だから、いざつて時のストッパーがないっつか……。もし、二人の意に沿わぬ事態になっちまったらっつか……。……」

俺も男なんだよ？ 分かってるの？ 待って何でそこで顔赤くして目を逸らすの、ねえ。

「だ、だいじょぶだよ！ どうなっても後悔しないからー」

だから待つて。その答えが不安すぎるんだけど。ノーガードもいいとこじゃねえか。

「……そう、ね。デートが終わる前なら、賞罰の履行期間にもギリギリ抵触せずに済むかしら」

取り決めの上では、由比ヶ浜のデートまで。不足している単語を恣意的に補えば、確かに成立しないこともない。

家に帰るまでがデートです。つまり俺と由比ヶ浜のデートの最中、雪ノ下の家に寄り道して、他に誰もいない密室で、由比ヶ浜と雪ノ下の身体を自由に触れていい権利を行使するわけです。オブラートに包んで言うけど馬鹿じゃねえの？

抵抗しろよ雪ノ下も。そう思って、雪ノ下を睨め付ける。

雪ノ下は俺の視線にたじろぎ、我が身を抱いて後ずさる。その頬は、薄暗い電灯のみが照らす夜陰の中でも分かるほどに紅く映えていた。

「……………劣情の籠もった瞳。身の危険を感じるわ」

しかし、そう口にする表情に嫌悪は見えず。

「私たちの身体の、どこ、でも……………。服の上からでも……………。下から、でも……………。指でも、手でも、腕でも……………唇、でも……………舌……………でも……………。その、それ、以外……………でも……………。比企谷くんの……………好きなの……………ように……………触られて……………。しまっ、のね」

雪ノ下は身をよじりながらうわごとのような眩きを、熱の籠もった呼気と共に寒空に溶かしていく。

おい由比ヶ浜このぼんこつのもんどうにかしてくれと視線を移せば、

「まっ、まだ今日はダメだかんね!? いきなりこんななるって思ってたから下着

可愛くないし……………。いつ、いつもはもつとちゃんとしてんだから! 今日またまたま!

たまたまだからね!」

こつちも駄目になつてるといふこの惨状。

やめろよお前らの台詞生々しすぎて想像しちゃうんだよしちやつたよ。くそっ、この状況で前屈みになつたらモロバレじゃねえか。

これから一週間、二人の手料理を食べて。密室の中、近い距離で勉強して。一切の言い訳も勘違いも挟む余地のないデートをして。挙句の果て、嫌がる素振りのない二人に、自由に触る。……………耐えられる要素がまるでないんだけど。

あれだな。今日はもう脳がやられてるな。二人の魅力に。違うか。俺が認めなかつただけで、ずっとこうだったか。

……………覚悟決めよう。死ぬ気で。

どんな覚悟が決まるかは……………夜の俺に任せよう。